

水面の上の上の上(上)



犬心

◆ プロローグ ◆

私は素足になって川に入った。この場所はあまり深くないから、入ったところで、足首の少し上までが濡れる程度。それに川幅も数メートルしかないから、行こうと思えば簡単に向う岸まで行ける。まあ、行ったからといって、何があるわけでもないのだけれど――。

近くに人工的な光源はなく、水面みなもに映った月が静かに揺れている。ただなんとなく、本当になんの意味もなく、少しだけ前に進んだ。

私が足を動かしたことで、水面がざわめくように大きく波打ち、映る月明かりがぐらぐらと崩れた。

――さらさらと流れる水の感触を感じようと、私は目をつぶり意識を集中する。それまで、ほぼ無いに等しかった私の感覚が徐々に水の流れを感じ取れるようになっていく。それでも、非常に曖昧な感覚。頭から足まで大した距離はないのに、とても遠くで水に触れているような気がする。

もともと、私の感覚は遠すぎる。月と地球くらいの距離があるのを、これだけ集中して、ようやく雲と地面くらいの距離に縮められる。何かに触った感触も、何かにぶつかった痛みも、感じるまでに時間がかかるし、極ごく僅わずかにしか感じる事ができない。だから、私の

世界はいつも曖昧で、脆弱だ。

水に入ってから数分経って、やっと気づいた。いや、思い出した、と言うべきか。まあ、そんなことはどちらでもいいのだけれど——。とにかく、今は冬だ。どうしようもなく、冬だ。だから、つまり——。

「冷たい……」

それだけ口にした。

ただの独り言。

小さなつぶやき。

口からこぼれたその言葉は、誰に届くわけでもなく、白く染まった息と一緒に虚空に消える……はずだった。

「そりやそうだ」

「え……!?!」

まったく想定外の、背後からの突然の返答に驚いて、声がした方に振り返った。

さっき私が川に足を踏み入れたあたりに人が立っていた。暗くてよく見えないけど、声からして、たぶん、男の人だ。

「こんな冷たい水の中にずっといるから、感覚がないんじゃないかと不安になったり心配

になつたりアホなのかと思つたりしたぞ」

——大方あたっている。でも、口には出さずに、ただ彼の方をじつと見る。月明かりしかない暗がりのためか、彼の顔がよく見えない。少し目を細めてみる。……余計に見づらくなつた。

彼はそんな私の視線も気にせず、水際でしゃがむと、暗い色をしたコートのポケットに入れていた手を出して、川の水に指先で触れる。

「うおっ！ やっぱムツチャ冷てえ」

——コート。そういうえば、私もさつきまでコートを着ていた。丈が長かった。膝よりも下、足首の近くまでであった。サイズを間違えたのか、そういうデザインなのか——。

「おーい。いつまでもそんなとこにいと風邪ひくぞー」

そういうえば、川に入る前に、靴と靴下を脱いで、そのコートも濡れそうだったから同じ場所に置いてきたんだった。その時点で、今が冬だということを確認できそうなものだけど、感覚が遠いと、どうもそういうことにも気づかないらしい。それとも、ただ単に、私の思考回路が愚鈍ぐどんなだけか——。

「……あんにやる、聞いてないな」

まあ、どちらかと言えば、後者かな。そもそも、あのときの私は、自分が脱いだものが

コートだという認識すらなかった。ただ、川に入ると濡れそうなものを着ているから脱ごう、くらいにしか考えていなかった。でも、コートを脱いだときに、寒いと感ずることができれば、今が冬だということくらい気づいたはずだ。だとすると――。

「おいつ」

「――!？」

いつの間にか、私の目の前にアップで顔があった。

驚いて、一歩後ずさる。

「あ――」

はじめ、何が起こったのかわからなかった。目の前にあったはずの彼の顔が急に消えて、私の視界は月が浮かぶ星空で埋め尽くされた。

――ああ、滑って後ろに倒れたのか、と気づいたときには滑ってから数秒が経っていた。それなのに、私の背中は水で濡れてはいなかった。

少し顔を上げて見ると、彼が私の両手をつかんで支えていた。

彼は目を見開いて私の顔を見ている。驚いているのか、困っているのか――。私には、よくわからない。

「だ、大丈夫か……?？」

私はその言葉の問うているところがよくわからなかったから、とりあえず小声で「さあ……」とだけ答えておいた。

果たして彼はなにが「大丈夫」であるのかを聞きたかったのか？

背中が濡れなかったかどうか？ それは私と同じくらい彼もわかっていることだろう。

怪我をしなかったかどうか？ 私は倒れてないし、どこにもぶつかっていないのに、どうして怪我をするというのか。

……生存確認？ まさか、そんな致命的なことにはなっていない。

「あ、あのさ……」

彼が控えめな口調で言う。

「そろそろ、起きてくれないかな」

「……？ 私、寝てない——」

——考え事はしてたけど。

「そうじゃなくて、いつまでもそんな体勢でいないで、早く起き上がってほしいと言ってるんだが……」

なるほど。彼の言葉を意識すると「その体勢からなら自力で起き上がれるはずだから、さっさとそうしろ」ということになる。それに対して、私は単刀直入に事実を伝える。

「無理」

「なんでだよ!？」

——そんな大声を出されても無理なものは無理だ。自慢じゃないが、私はこんな体勢になるのは生まれて初めてだし、その上、ときどき自分が立っているのか寝ているのかすら分からなくなるくらい平衡感覚がない。おまけに運動神経も最悪。だから、私がこの体勢から自力で立とうとするのは至極危険なことで——。

などと考えていると、彼はこの世のすべてに諦観ていかんしたような溜息を吐くと、無言で私の両手を引っぱって起こしてくれた。

「……ありがとう」

私がお礼を言うと、彼は眉をひそめて私の顔を覗き込んできた。

「ホントに大丈夫か？」

そう言うなり、私の額にぺちっと手を当てた。

「熱は……なさそうだな。ってというか、逆にスゲー冷たいぞ。おまえは変温動物か」

……。

「……………」

……………。

「……せめてもの慈悲で軽いツツコミの一つでも入れてくれないか」

「……？」

「ああつ！ もういいから、さっさとここから出るぞ。いつまでもこんなとこにいたら、二人して風邪ひくだろうが！」

言いながら、私の手を引き、川から出ようと歩きだした。

「あつ——!!」

——怖い。

すごく、すごく怖い。

他人のペースで歩かされることが。

腕に感じるのは、どこか遠くの私が引つ張られているような、曖昧な感覚。

足に感じるのは、柔らかい綿わたの上を歩いているような、不安定な感覚。

それなのに、視界の両脇の景色はどんどん後ろに流されていき、川岸がどんどん近くなつて——。

噛み合わない感覚と感覚。

私と現実世界の溝がさらに広がっていく。

それを意識すればするほど、恐怖が増して、視界が狭まって、鼓動が速くなった。

——そして、無事川から出た瞬間、自分でも気づかないうちに、前のめりに倒れそうになつて……

……彼に抱きとめられていた。

それに気づくまでに、私の顔が彼の胸のあたりにうずもれているということに気づくまでに、数秒を要していたと思う。

「——大丈夫か？」

「あ、うん……大丈夫……」

聞かれて、咄嗟とっさにそう答えた。でも、実際、自分でもなんて言ったのか、よく分かつていなかった。

——さつきまでとは違う、妙な感覚に包まれていた。

生まれて初めて感じる感覚。身体からだの内側から温かくなってくるような、そんな……。生まれて初めて感じる感情。心の中に白く揺らめく火が灯ったような、そんな――。

ずっと感じていたと思った。

決して感じてはいけなかった。

わけが、わからなかった。

でも、どこか心地よかった。

——彼が、引き剥がすように、私の身体から離れた。
同時に、それまで感じていたものがスツと霧散むさんした。

「さ、さーて。さっさと帰ろうか」

なぜか、目が泳いでいる。

と、私に背を向け、ズボンのポケットからハンカチを取り出して、足を拭きながら言う。

「お、おまえも早く足拭いて、そこのコート着ろよ」

なぜか、さっきまでより少し声が高い。あと、早口だ。

でも、まあ、そのことはあまり気に掛けずに、私も言われたとおり自分のハンカチで足を拭くことにする。前屈みになって、ゆっくりと、丁寧に足についている水を拭き取る。

感覚が遠いと、どこに水滴がついているかよくわからないから、こんな作業でも結構苦労する。

なんとなく全体的に拭き終わると、私はその場にゆっくりと腰を下ろした。

「……なんで座ってたんだ？」

とつづくに靴まで履き終わっていたらしい彼が尋ねてきた。だから、私は至極当然の答えを返す。

「こうしないと、靴下履けない」

「……マジか」

「ん——」

私は頷きだけ返して、自分の身支度に集中する。これもたっぷりと時間をかけて、紺のハイソックスと黒の運動靴を履く。途中、彼が「見えてるぞ」と言ってきたが、なにが分かるなかったから、とりあえず「そう」とだけ返しておいた。

私は慎重に立ち上がって、自分のコートを羽織った。

「——じゃあ、俺は帰るわ」

彼は鞆を肩に掛けてそう言うと、私に背を向けて歩き出した。

「うん……」

私はとても遠くに自分のコートの温かさを感じながら、彼に抱きとめられたときの感じを思い出そうとした。でも、一度離れて散り散りになってしまったそれは、輪郭すら思い出すことができなかった。コートを少し深く着て、首を襟で覆ってみても、感じるのはいつもの曖昧な感覚だけ——。

は——と吐いた息が、少しだけ白く染まって、すぐに消えてなくなった。

闇の中へ少しずつ消えていこうとする彼の背中を見て、私はなんとなくその名前を口にした。

「高浜、祐樹——」
たかはま ゆうき

聞こえるはずないくらいに小さな声だったのに、彼は立ち止まって、振り向いた。

「んー、呼んだかー？」

「……………」

私が無言で首を横に振ると、彼はまた顔を向かっていた方に戻して、片手を振りながら言う。

「おまえもいつまでもこんなところにいないで、とつとと帰れよー」

遠ざかる彼の背中を見送りながら、今度こそ絶対に聞こえないように、かすかな声でつぶやいた。

「——私がここにいるの、たぶん、半分くらいはあなたの所為せいなんだけどなあ」
言い終わって、なんの前触れもなく思い当たった。

ああ、そういえば、今日はスカートだった。

どうせなら、最初から最後まで楽しい方がいいでしょ？



「寒い」

私の頭の中はその一語で埋め尽くされていた。まだ十二月が始まったばかりだというのに、今朝の天気予報で見た予想最高気温は八度だった。今日の最高でそれなんだから、太陽が昇り始めたばかりの今なんて、きつと五度以下だ。

「ありえない……」

そんなちよつとした眩きで口から洩れた息でさえ真っ白だ。

今からこんなに寒かったら一月や二月はどうなってしまうのか。きつと氷河期がくるに違いない。そして人類は滅亡するのだ。そうなる前に冬眠でもして――。

「おっはよーっ」

パコン！

「ぐへっ」

いま最高に無防備で冬眠に入ろうとしていた私の脳細胞たちが、背後からの一撃によって瞬間的に覚醒し、それと同時に、大量に死滅した。

「こらこら。女子高生が『ぐへっ』とか言っちゃダメでしょ。そんなんじや、全然萌えな
いよー」

振り返ると、そこには明らかに失望しましたという顔で首を横に振っている葉しおりがいた。

「……女子高生がいきなり背後から友人をしばくのもダメでしょ」

私は後頭部をさすりながら反論する。

「やー、美月みつきが朝あっぱらからリュウキュウニセスズメみたいしんきくきに辛気臭い顔をしてたもんだからついねー」

「リュウ？ スズメ？ ……鳥？」

「魚よ。スズキ目、メギス科の、お・さ・か・な♪」

言いながら、葉は白ウサギのようにぴよこんと私のとなりに並んで歩きだした。

なぜただのウサギでなく白ウサギと思ったのか――。理由は簡単。葉は白いコートに白いマフラーに白い手袋、おまけに白い毛糸の帽子までかぶっている。ついでに肌もかなり色白だったりする。

今更ながら改めて思う。

なんだコイツは？

「雪景色の中に置いたら完全に同化しそう……」

「それなら、狙われなくて済むね」

「誰に？」

「さあ？」

栞は小首を傾げてとても不思議そうな顔をする。不思議なのはこっちだというのに――。

「あのさ……思いつきで何か言うのやめてくれない？」

「美月知ってる？ 天才ってのは九十九パーセントの才能と一パーセントの閃きで出来るんだよー」

「才能の割合多っ。てか、努力はどこいった？ 努力は？」

「努力う？ それは赤道直下のダウンジャケットみたいなものだねー」

「必要ないってか!? 努力なんか不要ってことなのかつ!?」

私は涙ぐみながら栞に掴みかかって、ゆさゆさと前後に揺らす。

「そ、そんな泣かずとも……」

栞は困っているような、実はそうでもないような微妙な顔をする。

「この非凡人めっ」

吐き捨てるように言つて、栞を放す。

栞は、にはは、と笑いながら私の所為で乱れたマフラーを直している。

——清澄栞きよすみしおり。自称、万能少女。ふざけていると思うが、それが本当なんだから仕方がない。

まず、栞は異常なほどの記憶力を持っている。写真記憶とか映像記憶とか呼ばれる能力を生まれつき持っていて、見たものすべてを細部まで写真のように記憶できるらしい。しかも、一度記憶したものは絶対に忘れないとか……。だから栞は試験では常に満点を取っている。それだけでも凄すぎるというのに、他にも絶対音感とか天才的な絵の才能とかも持っている。その上、驚異的な運動神経まで持ち合わせているのだから、もはや手のつけようがない。

私も運動、特に短距離走には自信があつて、中学のころ、陸上部内でトップクラスのタイムを持っていたくらいだ。その私に、栞は百メートル走で一秒近くもの差をつけてゴールした。もう私のプライドとかアイデンティティとかそこらへんのものがズタボロだった。おまけに、栞はルックスもかなり良い。美人系ではないが、可愛い系だ。身長は低くて細身だけど、それも可愛い顔と相まって、その小動物的な愛らしさを増幅している。こんな

栞を好きになるような男はきつとロリコンに違いない。

などと考えながら、彼女の顔をしげしげ観察していると――。

「――んにゅ？」

首かしげて『んにゅ』とか言うしっ!!

そうだ、栞は時々こんな風に謎の言葉を発する。しかも、その一つ一つが、女の私ですら『キュン』となってしまうような、凄まじい破壊力を持っている。

「……栞……それ、狙ってやってるでしょ？」

私は若干めまいすら感じながら問う。

「んー、何がー？」

マフラーの先についている白いポンポンを指先でクリクリしながらしらばっくれる。

こんな仕草も憎らしいほど愛らしい。

――ハッ!? ダメだ。このままだと私、ロリコンになってしまう。

私は両手で頭を抱えて、ダメな方向に行こうとしていた脳を必死に正常に戻そうとする。ダメだぞ私! がんばれ私!

「あのさー、美月。お取り込み中悪いんだけど――」

「……何？」

「このままだと私たち、遅刻するよー」

「……………」

私は自分の鞆からケータイを出して時間を見る。

「……………」

——あと三分。

「なるほど。どおりで周りに私たち以外の学生がいないわけね」

「あはは。そーだねー」

「……………」

「……………」

「全力ダッシュユ！」

「ええー!? 走るのー?」

とか言いながら、ぴったり私の後についてきている。

「めんどーだよー。歩こうよー」

などとぬかしながら、余裕の顔で私の横を走っている。

——私はあまりの遣^やる瀬^せ無^なさに、ちよつと泣きそうだった。

校舎内に飛び込むと同時にホームルーム開始のチャイムが校内に鳴り響いた。

うちのクラスの担任は大抵このチャイムが鳴ったときには教室にいて、出席確認をする。それも一人ずつ名前を呼ぶなんていう生温い方法じゃなくて、ざっと教室を見渡し、空いている席の生徒を『欠席』にしてしまうという慈悲のカケラもない出席確認方法なのだ。

「……終わった」

これで出席簿の私の名前の欄には「欠」の一字が書き込まれることだろう。

まあ、一限の授業の先生に言えば「遅」に変えてくれるからいいんだけど……いや、遅刻もよくはないか……。

「残念だったねー」

と、うなだれる私の顔を笑顔で覗き込んでくる栞。

「いいよねー、栞のクラスは由実先生だもんねー」

「んー、そうだねー。由実先生は寛容だからねー」

そう。栞と私はクラスが違う。去年は一緒のクラスだったけど、今年は栞が八組、私は二組だ。

八組の担任の野中由実先生はホームルームが終わるまでに教室に入れば遅刻ではないという素敵な思想ホッシーをお持ちの先生だ。八組の生徒が羨ましくてならない。

「ま、そうは言っても、連絡事項とかがないと、さすがの由実先生もすぐに帰っちゃうから、あんまり悠長にはしてられないんだよ。私のクラスは四階の一番奥だし——。ってことで、じゃあまたねー」

そんなことを言いながらも、全然急ぐ素振りなんて見せずに、ぴよこぴよここと四階へ上って行った。……本当に白ウサギみたいなやつだ。

——さて、私のクラスは三階の階段から一番近い位置にある。というか、栞の背中を見送ったこの体勢から右向け右をすれば、正面に私のクラスのドアがあったりする。そんなもって、そのドアの向こうでは担任の森広先生が嬉々として私を欠席扱いにしているのだ。

「……………」

想像するとちよつと悲しくなる。でもまあ、自業自得なわけだし、こんなところで立ち止まっても仕方ないから、何食わぬ顔で教室に侵入しよう。

と、ドアに手をかけようとしたところで、ドアの方が勝手に開いた。

「い、いつの間に自動ドアに——!?!」

「そんなわけないだろ」

右手をドアの方に伸ばしたまま固まっている私の正面に呆れ顔の高浜君が立っていた。

——高浜祐樹。たかはまゆうき身長は私より頭半個分くらい高く、若干痩せ型の体型。バスケット部のレギュラーでポイントガードだ。一年のときから同じクラスで、なぜか私と彼はしょっちゅう席が近くになるから自ずとよく話をしている。

——で、そんな彼は明らかに「なにやってんだコイツは」と言わんばかりの目で私を見ている。

うん。困った。困ったよ。こんなときは、こんなときは……そうだ、まずは朝の挨拶だ。

「オーイエ！ グツモーニンツ」

我ながら完璧な発音だった。ネイティブの発音すら凌駕してしまっていて、逆にネイティブには伝わらないくらいに完璧な発音だった。

「……なぜ英語だ」

だけど、彼は怪訝けげんそうな顔で私を見てくる。

どうやら英語はお気に召さないようだ。

「じゃあ、ブオンジョルノー」

「なぜにイタリア語？」

「アンニョンハセヨ」

「だからといって韓国語にされても……」

「って、じゃあ何語なら満足なのさー!？」

「そんなむくれるなよ……。つか、普通に日本語でいいだろ、日本語で」

「日本語!？」

「なぜ驚く？」

「えっと……日本語の朝の挨拶って、なんだっけ？」

「アホか! 『ボンジュール』に決まってるだろ！」

「あー、そうだったね。ボンジュール♪」

「おう。ボンジュール♪」

「……………」

「……………」

私と彼は笑顔で向き合ったまま数秒固まった後、シンと静まり返っている教室の中に向かって二人で同時に「誰かツツコンでよ!」と叫んだ。

「……………」

「……………」

しかし、世の中というのは無情なもので、待てど暮らせど反応は皆無だった。

完全に無視だった。

完璧に黙殺だった。

私は泣きそうだった。

「——世知辛い世の中になったものねー」

「まったくだ」

彼が腕を組んで深く頷きながら同意する。

「はあ……。あんたらの夫婦漫才に横からツッコミを入れられるツワモノなんているわけないでしょ」

一番前の席で私たちのやり取りを今日の外気よりも冷たい目で見ていた相沢美智子、通称ミッチーが呆れた声で言ってくる。

「夫婦じゃない！」

と叫んだ私を完全に無視して高浜君に話かけるミッチー。

「そんなことより、高浜君、もっと大事な話があるでしょ」

さすがミッチー。見事なスルーっぷりだ。

むーっとむくれてみたけど、ミッチーはこっちを見ようとしなない。

「もっと大事な……？ ああ、ノルウェーとスウェーデンはどっちが西でどっちが東かよ

く分からなくなるという………ああ！ 痛い、止めて！ プラスチック製の筆箱の角で脇腹をグリグリしないで！ 地味に痛いから！ ごめんなさい！」

なぜか微妙に説明口調で痛みながら謝る高浜君。

私もミッチーのあの攻撃は何度か受けたことがあるけど、本当に地味に痛い。

「はあはあ………」

彼はわざとらしく息を乱しながらミッチーと距離を取る。

「それで、大事な話って何？」

さすがにこれ以上ミッチーに無益な殺生をさせるわけにもいかないから、私から話の軌道を修正する。いや、彼、生きてるけど……。

「それに、珍しく先生がまだ来てないみたいだけど………」

そう。時間にだけはうるさい森広先生がまだ教室内にいない。というか、先生がいる前で今までの一連のやり取りを行えるほど私たちは大物じゃない。それにもし先生がいたら、相当序盤——「アンニョンハセヨ」あたり——で先生のツツコミが入っているはずだ。

「そのことなんだけど………」

と、高浜君が私の方に向き直って言う。

「おまえが来る五分前くらいに校内放送で森広先生から呼び出しがあつてね」

「呼び出し？」

「うん。『二年二組の佐々岡美月ささおかみつきは十分以内に家庭科室に来るように。以上』だ、そうだ」

「……………」

「……………」

「私がここ来てから何分くらい経った？」

私のその問いに、彼は少し逡巡しゆんじゆんした後、とても言いづらそうに。

「…………まあ、かれこれ、五分くらいじゃない？」

「…………高浜君、五分十五分？」

彼は私からおもいつきり目をそらして小声で答える。

「…………十分です」

「……………」

「……………」

「高浜君のブアカー!!」

私は涙ぐみながら家庭科室へ向かって走り出した。

「ええっ!? お、俺の所為？」

「まあ、半分はねー」

必死に走る私の後方で、高浜君とミッチーのそんな会話が聞こえた。



「す、すみません！ 遅くなりました」

全力で走り、息も絶え絶えになりながら、家庭科室に到着した。

「三分の遅刻ですね」

と、私のクラスの担任であり数学教師の森広誠治先生もりひろせいじは、シャープな黒フレームの眼鏡を右手の中指でスツと直しながら言う。これは先生の癖みたいなもので、別に眼鏡がずれていなくてもよくこの行動を取っている。

相変わらず眼鏡の似合う好青年といった顔立ちの人だけど、実際は今年で三十歳だから、もはや「青年」ではない。そんな外見のためか、一部の女子生徒からは絶大な人気があったりする。私も一年の初めのころは良い先生だなーとか思ってたんだけど……性格が、なんとというか性格がアレなのだ。別に性格が悪いというわけではない。でも、性格が、変だ。なんというか、こう……変、なんだ。

「遅刻したのでペナルティです。今日の数学の授業であなたに三回当てます」

「あう……」

数学は苦手なのに……。

「チョークを」

「チョークを!?!」

「ははは、冗談ですよ」

笑顔が、笑顔が爽やかすぎる……。

「そんなことより、これを見てください。僕の渾身こんしんの作品です」

そう言つて、私に見せてきたのは、家庭科室内で一番大きな先生用の机からもはみ出すほどの大きさの紙に書かれた、巨大な――。

「――あみだくじ……ですか？」

「そうです。これで今週末にある球技大会の参加種目を決めるんです」

言われてよく見ると、縦線はうちのクラスの人数分あつて、その先には今週の金曜に予定されている球技大会の種目が書かれている。

「……先生、いろいろ聞きたいことがあるんですけど」

「なんですか？ 教室にみんなを待たせているんですから手短かに」

「はい。ええと、まず、なんでこんなに大きいんですか？」

たかが三十人分のあみだくじを作るなら、ここまで大きな紙でなくても余裕でできる。これでは紙が大きすぎて、極太のマジックで線を書いているにもかかわらず、線と線の間に対応な幅がある。

「これはですね、教室の黒板と同じサイズにしてみましたよ」
「なぜ!？」

「その方が……迫力があるでしょう？」

「そ、それはそうですね……」

「これの長さを測るのに家庭科室のあのメートル物差しは重宝しました。恐らく、ぴったり黒板サイズのはずです」

そんな理由で家庭科室にいたのか、この数学教師は……。

「え、えーと……あと一つ聞かせてください」

「はい、なんででしょう？」

「どうしてあみだなんですか？ みんなの希望を聞いて、それぞれが出たい種目に出た方がいいんじゃないですか？」

「ふむ……それではつまらないじゃないですか」

「え？ それはどういう——」

「例えば、サッカー部の人ばかりが、この球技大会のサッカーに出たとしましょう。うちのクラスも、別のクラスも、です。そうなれば当然レベルの高い試合になるでしょう。でも、それではただのサッカー部の紅白試合じゃないですか。それでは面白くない。そんなものは部活でやればいいんです。これは球技大会。もちろん、勝ち負けに拘こどわるなどとはいいません。でも、普段部活ではやっていない種目や苦手な種目に出るのもまた一興——。そうは思いませんか？」

「た、確かに……」

先生の妙に説得力のある言葉に、私は完全に納得させられた。

「わかっていただけましたか。それでは、よろしくお願いします」

「……え？ 『よろしく』って……何をですか？」

「このあみだの紙を教室まで運ぶのを手伝ってください。そのためにあなたを呼び出したんですから」

「ああ、なるほど……」

私は学級委員長だから、こういう雑用に駆り出されるのは日常茶飯事なのだ。まあ、実はその学級委員長もあみだくじ——そのときの紙は普通のA4サイズだったけど——で決められたものだったりする。あのかきは本当に運が悪かった。

でもまあ、今回は特別苦手な球技があるわけじゃないから、私はどの種目になっても構わないけど……。

——ああ、よく考えると一つだけ苦手、というか、あまりいい思い出のない種目がある。ドッジボールだ。小学生のころ、よく昼休みにクラスみんなでドッジボールをしていた。私はボールを取るのが苦手で、コート内を逃げ回っていた。すると味方が全員当てられて、残った私一人が集中砲火を浴びせられた。でも、避けるのだけは無駄に得意だったから、全然当たらないのだ。そして、昼休み中ずっとコート内を曲芸じみた動きで逃げ回るハメになって、正直しんどくて仕方なかった。そんな、どちらかという嫌な思い出が——。

そんな回想に耽りながら、先生と一緒に教室へ戻り、クラス全員であみだをやった。

私は、ドッジボールだった……。



うちの高校なぜかはこんな寒い時期に球技大会がある。開催日は四日後。寒いときこそ運動して身体からだを温めよう、という趣旨らしいけど、寒さにすこぶる弱い私はその考えにあまり賛同できなかつた……去年は——。そう、『去年は』だ。去年の私は、そんなことす

るより暖房をガンガンきかせた教室でぬくぬくしてるほうがよっぽど温かいじゃんか、とか思っていた。だがしかし——!!

「今年の私はやる気に満ち満ちてるわよー!!」

「貴重な昼休みにクラスの女子全員をこんなところに集めた上に、いきなり意味のわからない絶叫をありがとう」

「やー、どういたしまして」

「今のは思いつきり嫌みなんだけど……」

ミッチーは呆れた顔をして溜息を吐いている。

見渡すと、集めたクラスメイト全員がミッチーと同じような顔をしている。

「どうしたミッチーとその他大勢。今からそんなことではヤツらには勝てないぞヤツらには！」

「ヤツらって……誰よ？」

「八組の連中に決まってるでしょ」

意味もなく胸を張って答える。

「八組って……もしかして球技大会のアレ？」

「そう！ クラス対抗バスケットボール大会!!」

私は声高々に宣言した。

——クラス対抗バスケットボール大会。球技大会の日の午後に行われる目玉種目。その名の通りクラス対抗でやるバスケの試合で、トーナメント形式だ。ちなみに男女別で、男子の部が先に、女子の部が後に行われることになっている。

この試合のルールが多少特殊で、誰も覚えられないからか、『クラス対抗バスケットボール大会公式ルールブック』なるものが存在していて、そのページ数は二十を超えている。確実にそのすべてを覚えているであろう白い人物が一瞬頭をよぎったけど、それは考えないことにする。——で、なぜかこのルールブック、改定に改定が繰り返され、現在第七版だそうだが、それもまあ細末なので置いておこう。ともかく、そのルールブックによると大まかなルールはこうだ。

● 試合時間は前半十分、後半十分、ハーフタイムは三分

● 人数は五人対五人

● 選手交代の回数は自由
ただし、

・コートに入った選手は三分間は交代できない（怪我をした場合などを除く）

- ・コートから出た選手は三分間は交代できない（ハーフタイムの三分は含まれない）
- ・同じ選手が十分間以上交代しないでコートにいることはできない
- ・クラス全員が一度はコートに出ないといけない（怪我人や病人などを除く）

——で、この選手交代のルールが厄介なのだ。このルールの所為でバスケの上手い人がずっと試合に出ていることはできない。その反対に、どんなに下手な人でも最低三分は試合に出ないといけないわけだ。

うちのクラスの女子は十四人。つまり、五分ごとに五人が交代すれば、十五分で全員コートに出ることになる。でも、上手い人は最初から十分出て、ハーフタイムで交代して、後半開始後三分経ったらまたすぐに交代して——。

「——なんて作戦を私は三日三晩夜しか寝ずに考えたわけよ！」

「夜、寝てるじゃん」

「で、ついに私はたったひとつの冴さえた作戦を思いついたわけよ！」

「……わたしのツツコミはスルーなわけね。なんなの？ 今朝の意趣返しなの？ ねえ？」
隣でミッチーが何やらごちゃごちゃ言ってるけど、気にしない。

「そして、その作戦というのは——」

ここで私はとても大きなタメ——「それでは、この七百五十万円には戻れません」と言
って小切手を破った後の司会者のようなやつ——を作り、両手を大きく広げて一言。

「みんなが上手くなって、みんなで戦って、みんなで勝てばいいのよ!!」

キマツた。

場を静寂せいじやくが支配する。

そして、すぐに大喝采……とはならなかった。

ほぼ全員が、ぽかんとした顔をしている。

ただ一人、私から少し離れたところにいた岡島涼香——本名の読み方は「すずか」おかじますずかなの

に、なぜか「リヨウ」とか「リヨウちゃん」とか呼ばれている——が目を輝かせながら駆
け寄ってくる。そして、そのまま私に怒涛の勢いで抱きついてきた。

「美月いーっ!!」

「うわっ!」

「それよ! 私が待ってたのはその言葉なのよ!」

「痛い。痛いから離れて!」

私より頭一つ分くらい背の高いリヨウちゃんに強く抱きしめられて足が少し宙に浮いて
いる。

「美月ー!!」

「耳元で人の名前を叫ぶなーっ」とにかく、早く離れてほしい。

「ビューティフルムーン!!」

「人の名前を勝手に英語にするなっ！」

そんな呼ばれ方は初めてだ。

「愛してるうー!!」

「愛すなっ!!」

私にそんな趣味はないっ！

そこでようやくリョウちゃんは私を解放してくれた。

見ると、クラスメイト達がさつきよりも呆れた顔で私とリョウちゃんの方を見ている。

リョウちゃんもそれを見て、少しばつが悪くなったのか、こほん、と小さく咳ばらいをして、取り繕うように言う。

「わ、私も美月の意見に賛成。八組にだけは……いや、まどろっこしい言い方は止め！

八組の清澄葉だけには負けられない。でも、私一人の力じゃ葉には勝てない。だから、みんなも協力して。お願い！ このとおりっ！」

リョウちゃんは顔の前で両手を拝むように合わせる。彼女も私と同じくらい、いや、たぶん私以上に、栞に打ちのめされた経験があるんだろう。

もちろんリョウちゃん以外にも、スポーツや勉強で栞に勝負を挑んで、完膚かんぷなきまでにやっつけられた人は何人も、いや、何十人もいることだろう。

——栞は高校入学直後から『万能少女』として有名だった。彼女の才能はスポーツや普通の勉強にとどまらず、料理や裁縫、美術や音楽、チェス、将棋、麻雀、テトリス、モノポリー……どれをやらせても常人を遥かに超えた実力を発揮する。そんな噂を聞きつけて学校中から様々な分野の猛者たちが栞に挑戦して、そして例外なく敗れていった。

なぜそんな噂が入学直後に流れたのか——。

そんなのは簡単だ。栞自身が言ったのだ。入学式の後、教室での自己紹介のときに胸を張って、私は万能だ、と。そのとき同じクラスにいた私は、今でも彼女の衝撃の自己紹介のセリフを一言一句覚えている。

「清澄栞です。血液型はA型。身長は144センチ。別に誰も興味はないだろうけど、上から68・51・70。……それと、ここからが大事なんですけど、私は、万能です。勉強でも、運動でも、ゲームでも、その他なんであっても、私に勝てる人はほとんどいないと思います。まあ、そんな感じなんで、よろしく♪」

身長を言うくらいならわからなくもないんだけど、なぜいきなりスリーサイズを公開したのか。スリーサイズを公開しておきながら、なぜちやつかり体重だけは公開しなかったのか。いや、そんなことより、なぜ自分が万能だと公言したのか。しかも、それにとどまらず、『私に勝てる人はほとんどいない』などと挑発じみたことを言った上で、『よろしく♪』と最高の笑顔で言っていた。本当にあの白いヤツの考えていることはわからない。その後、栞はいろんな人の挑戦を受けては、ことごとく打ち負かしていったわけだ。でも、彼女は、その真っ直ぐな性格と、どこか憎めないキャラのお陰で嫌われたりすることはなく、むしろ、かなりの人気者になった。

とはいえ、彼女に挑戦するような人たちは基本的に皆負けず嫌いなわけで――。

「栞か……」

「確かに、あの娘に勝ついいチャンスかもしれない」

「差しでの勝負じゃないってのがちよつと不服だけど……」

「でも、一度くらいは何かで勝ってみたい……よね」

――ほら、もう何人かの闘志に火がつき始めた。

「よし、いっちょやりますかっ！」

「うん。私も協力する」

「私もっ！」

「そうこなくっちゃ！」

数人がやる気を出したのを見て、リョウちゃんがパチンと右手の指を鳴らす。

だけど、もちろん全員がやる気になってくれたわけではなく……。

「えー、面倒ー」

「私、バスケ苦手だからパス」

「私も抜けさせてもらおうわ。あー、もちろん本番は出るけどねー」

「わ、わたしも……」

などと口々に言っつて、約半数の人たちは私の横を通り抜けて体育館の出口に向かって歩いて行く。

「あ、ちよー」

と、私が彼女たちを引きとめようと振り返った瞬間。

「ちよつと待ったあぁーっ!!」

彼女たちが出ていこうとしていた体育館後方の出入り口で、クラスメイトの女子で唯一この場にいなかった空閑晴河くがはるかが仁王立ちして、叫んでいた。

「教室に行ってもだーれもいねえから、みんなしてどこ行ったのかと思えば、こんなとこ」

で何だか面白そうな話してんじゃねえか」

空閑さんはその場で靴を無造作に脱ぎ捨てると、ズカズカと私たちの方に歩いてくる。

「なんだなんだ、八組をバスケットでやつつけようって話か？」

いま来たわりには意外と話の流れを掴んでいる。

「今度の球技大会のアレだろ？」

というか、ほとんど話を把握している。

……この人は一体いつから聞いていたんだらうか？

「そんな面白い話にアタシを参加させないっつーのはどういうことよ？　なあ、ミツキン

よ」

そんなことを言いながら、恨めしそうな顔で私を見てくる空閑さん。

ちなみに私のことを「ミツキン」なんて呼ぶのは彼女だけだ。私は構わないのだけど、

微妙なあだ名だとは思う。……まあ、それはさて置き。

「や、別に参加させなかったか、そういうわけじゃなくて——」

「いや、みなまで言うな。わかっている、わかっているとも、ミツキン。つまり、アタシ

が遅刻して、昼休み入ってから登校したのが悪かったわけだろ？」

「その通りだ、このドアホウ！」

私の後にいたりリョウちゃんがそう言いながら、スタスタと空閑さんに迫り、グリグリと彼女の頬をグーで撫でる。

「痛ひ——。いきなり何をする、リョウ」

「あんたねー、出席日数ヤバいのわかってる？ このままだとホントに留年よ」と、リョウちゃんが両手を腰に当てて空閑さんを咎める。

「わかってるよ、そんなこと……。でも、うちの担任さあ、ちよつとでも遅刻すると欠席扱いにするじゃんか？ だから、ちよつと朝寝坊して『あー、微妙に間に合わねえ』って思うと、つい二度寝しちまうんだよなー」

「担任の所為にしない！」

「ハイハイ。善処しますよー」

空閑さんは茶色に染めた少し癖のあるショートヘアを弄りながら適当にリョウちゃんをあしらう。リョウちゃんはリョウちゃんで「——ったく、あんたはー」などと言いながら半ば諦め気味だ。なんだかんだでこの二人は仲がいい。二人ともバスケット部だし——。

「さて、そろそろ本題に戻ろうかつ！」

空閑さんは圧倒的に自分に不利な空気を振り払うように言うと、彼女の登場で出て行くに出て行けなくなり、立ち止まって彼女とリョウちゃんのやり取りを傍観ぼうかんしていた数名の

クラスメイトの方に向き直る。

「なんだね、キミたちはー？　こんな面白そうなイベントが目の前に転がっているというのに、参加しないとも言うのか？　もしかしたら、ここで頑張るとフラグが立つかもしれないよ、フラグが」

「フラグ？」

「そう。例えば、シュートしたボールがたまたま通りかかったイケメンに当たって、『ああ！　ごめんなさい！』『いやいや、大丈夫だよ。それより、シュートなら俺が教えてあげようか？』『は、はい。お願いします』となって、そこから二人の恋が始まったり——」

「ねーよ！」

リョウちゃんが間髪入れずにパソコンとツツコミを入れる。

「じゃあ、走っていて足を滑らせて転びそうになったところを、たまたま通りかかったイケメンに助けてもら——」

「だからねーよ！　そもそも、こんなところを『たまたま通りかかるイケメン』なんてないだろ」

「まったく、リョウは本当に夢がないな。そんなんだからいつまで経っても彼氏ができないんだぞ」

「いや、私、彼氏いるから」

「なにーっ!? 聞いてないぞ、そんなこと!! いつ、どこで、誰から寝取った!？」

「人聞きの悪いことを言うなっ！」

「あの一、お二人さん……」

私は、完全に脱線して、柵を突き破って、そのまま民家の庭を縦横無尽に荒らしまくっているような二人の会話に割り込む。

「あなた方が白熱してる間に、あの皆さんがそーっと逃げようとしてるんですけど……」

「なぬっ!？」

「いつの間に!？」

二人して焦る。というか、もっと早く気づこうよ……。

すると、いきなり空閑さんが両手をあげて大声で言う。

「よーし分かった! キミたちがそこまで言うなら——」

や、彼女たちは何も言っていないんだけど……。単に、こっそり逃げようとしてるだけで。

「バスケット大会で八組に勝ったら、アタシが全員に駅前あの店のチョコパフェを奢ってやろうじゃないか！」

物で釣る作戦だった。

確かにあの店のチョコパフェは絶品だけど、そんなんで釣られ――。

「よし、その話、乗った！」

一人釣られたー!!

「その話、マジで言ってるのよね？ だったら私も――」

「あ、まあ、昼食前の軽い運動程度だったら付き合ってもあげても、いいかな」

「わ、私も――」

さらに三人が食いついてきた。

甘い物の威力は絶大だった。恐るべきスイーツパワー。

正直、私も食べたい。

あ、さつき空閑さん『全員に』って言ってたから、私も奢ってもらえる！

ヤッホー!!

……って、私がテンション上げてどうする。

さてさて、これであと二人が乗ってきてくれれば、全員が練習に参加してくれることになるわけだけど――。

「ゴメン。私、そういうの興味ないから――」

と、鈴村朱莉すずむらあかりが本当に興味なさげな顔で言い、ひらひらと手を振りながら出口へ向かう。

「あの……すみません……私も……」

先ほどからずつとうつむいていた園山千恵そのやまちゅえはさらに深く頭を下げて謝ると、駆け足で朱莉を追い越して体育館から出て行ってしまった。

「やっぱりと言うか、何と言うか……」

私は二人の背中を見ながら独り言ひとりごとちる。

朱莉はほとんどの物事に興味を示さないし、何事に対しても全くやる気を見せない。

千恵ちゃんはというと、学力はかなり高いんだけど、運動の方はからっきしダメで、体育の授業のときは大抵隅の方で小さくなっている。

そんな二人だから、そう簡単には参加してもらえとは思ってなかったけど――。

「リョウちゃん、空閑さん！」

私よりも出口に近い位置で朱莉と千恵ちゃんが出て行くのを見ていた二人に声を掛けて振り向かせる。

「ん？」

「なんだ？」

私は、リョウちゃん、空閑さんの順に目配せをしてから切り出す。

「じゃあ、私は――」

「ああ、そうか。行ってこい、ミツキン。そういうのは発案者の仕事だからな」と、不敵な笑みを浮かべる空閑さん。

「あー、なるほどねー。ま、ここは私たちが仕切つとくからさ」

と、両手を腰に当てて、空閑さんと同じような顔をするリョウちゃん。

「ん、後は任せた！」

話の早い二人に感謝しつつ、私は逃げた二人を拿捕^{だほ}すべく、全力で駆け出す。

——体育館を出て、まず初めに目についたのは、ゆっくりと歩く朱莉の後ろ姿だった。

「あっさりちゃーんっ！」

私は最高の親愛と敬意と情熱を込めて名前を叫びながら、速攻で朱莉に迫る。

「……………」

彼女はどこに焦点を合わせているのかわからない目でこちらを一瞥^{いちめつ}する。

そして、私の伸ばした手が彼女の肩に触れようとした瞬間、彼女はそれを紙一重^{かひ}で躲^{かわ}し

て、そのまま一気に逃亡をはかる。

「ちっ、逃がさん！」

走り出した彼女を全速力で追う。

「ふふふ……。本気を出した私から逃げ切れると思うなよー!!」

「えぐえぐ……。逃げ切られたよー……」

昼休みも後半に差しかかった頃、私は教室の自分の席で突っ伏して泣き濡れていた。我ながら最高に無様ぶざまだった。

「おーい、どうしたんだ？」

悲哀に満ちているであろう私の後頭部をポンポン叩きながら、高浜君が尋ねてくる。

「……逃げ切られたんだよー」

「誰に？」

「………朱莉」

「あー、なんだ、昼休みに女子全員でいなくなって何してるのかと思ったら、鬼ごっこでもしてたのか？ それともドロケイとか？」

「や、そうじゃなくて——」

なんだか唐突に平常心を取り戻した私は、顔を上げて、これまでの経緯をとても端的に語ることにした。

「みんなでバスケの練習。朱莉と千恵ちゃんが逃亡。とりあえず朱莉を猛追。そんで……」

逃げ切られた」

「……………」

「……………」

「……………なるほど」

少し間があつたのは、高浜君が私の素晴らしい説明能力に驚嘆きょうたんしていたからだ。……たぶん。恐らく。きっと。

「鈴木さんに、ね……」

彼の表情が少し曇つたように見えた。

……………なぜに？

「——っていうか、彼女、なんであんなに速いのさ、駿足きゆうそくなのさ、快足かいそくなのさ!？」

私は糾問きゆうもんするような勢いで彼の両肩をがしつと掴む。

「帰宅部の中では私が二番目、葉の次に足速いと思つてたのに！ なんでさ！ 彼女、いっつもやる気なさそうだし、体育のときも、体育祭のときだって大した活躍なんてしてなかつたのに、なんであんなに足速いのさ！」

「んー、それなんだけどさー」

とても興奮する私とは対照的に、彼は頗まことる冷静に答える。

「鈴木さんも、ある意味、万能なんだよ。あの清澄さんみたいに——」
「え——？」

思いもよらない彼のその言葉に、私は凍りついた。



「——それで、その授業中に森広先生がね……………って、美月いー、聞いてるうー？」
「……………」

「美月ーっ!!」

「うわっ!! ビックリしたー」

栞がいきなり大声を出しながら私の顔を覗き込んできたもんだから、驚いて飛び上がりそうになった。

——正直、心臓に悪い。

「なんだよー。ビックリしたのは私の方だよ。さつきからずっとボーっとしてて私の話全然聞いてないしさ」

プンプンという擬態語が最高に似合う顔で私を睨みつけてくる。

「ゴメン、ゴメン。ちよつと考え事しててさ——」

学校が終わり、葉はいつもように私のところへやって来て、帰宅部の私たちはいつものように最寄の駅に向かって二人で歩いていた。

いつもは、その日あった面白いことの話とか、最近読んだマンガの話とか、そういう取留めのない会話をしながら帰るのだけ——。

「珍しいね。さつきから黙りこくって。……何か悩みでもあるの？」

心配そうな眼差しで私を見つめる葉。

「やー、悩みというか、なんというか……」

私がい淀よどんでいると、葉は急ウイットに富んだイタズラを思いついた子供のような顔になる。

「んー？　もしかしてアレかなー？　恋の悩みかなー？　そんなんだったら、この葉おねーさんがいくらでも相談に乗ってあげちゃうよー」

そんな戯言ざれごとを言いながら、コートを着てるともはや真っ平らにしか見えない胸をポンと叩く。

「はははははっ。誰がどこからどう見ても私の方が年上にしか見えないでしょ」

笑いながら、私よりも顔一個分は低い葉の頭をワシワシと撫でる。

「むーっ」

くしゃくしゃになった長い黒髪を手櫛で直しながらむくれる葉。

「私だって一応気にしてるんだよー。身長は全然伸びないし、胸だってさ、最近なんか妹の方が——」

あー、なんかブツブツ言いながらイジケ始めてしまった。いくら万能とはいえ、流石さすがに自分の体型までどうにかできるものではない。というか——。

「葉は十分可愛いんだから、それでいいじゃんか」

「やなんだよー。私はもつと背が高くて、ボンキュボンみたいな感じがいいんだよー」
言われて、私はそんな体型の葉を想像してみる。

「……………ふっ」

吹いた。

「なんで笑うのさー!!」

「や、想像したら……つい、ね……」

「むううううーっ」

あ、さつき以上にむくれてしまった。

知らない人が見たら、誰もこんな彼女を万能娘だとは思わないだろう。ただの色白の可

愛い少女だ。

「——万能。万能ねえ……」

私は柄にもなく感慨深く呟いた。

栞は天性の特殊な能力や才能によって、望んだわけでもなく万能になった。

「なーに？ 私が羨ましいのー？」

いつの間にか機嫌を直していた栞が飄々ひょうひょうと尋ねてくる。まあ、そもそも初めから機嫌を損ねていたわけではない気もするけど。

「や、別にそういうわけじゃ……」

「でもねー、万能だって楽じゃないのさ。これでも色々苦労してるんだよー」
全くもって苦労しているようには聞こえない軽い口調で言う。

——と、ちようどそこで駅に着いた。

栞が先に定期を使って改札を通る。タッチアンドゴーだ。

私も彼女の後に続く。

二人で一緒に帰れるのはここまでだ。私と彼女は乗る電車の線が違うから、ホームも別。だから、いつもここで別れるのだけだ——。

まだ、別れる前に聞いておきたいことがある。

「——じゃあ、そんな能力いらなかったの？ そんな風になりたくなかったの？」

「いんや。そんなわけないじゃん」

即答だった。

私は、まあそうだろうなあ、と思いつつ彼女の後ろ姿に問いかける。

「なんで？」

「そりや確かに色々苦労はあるけどさ。でも——」

そこで振り返った彼女は、最高の笑顔を浮かべて、言った。

「今が、とお——っっても楽しいからねー♪」



——うん、まあ、普通驚くわな。鈴木さんは中学一年のときから、いや、正確には小六くらいからかな……。まあ、それくらいからずっと今みたいなキャラやってるから、この学校で彼女が万能だっってことを知ってるのは、きっと俺くらいだろうから。

ああ、言ってなかったっけか。俺は小学校のときからずっと鈴木さんと同じ学校だったんだよ。そういえば……。結構同じクラスになることも多かったかな。

——ん？　どうかしたか？

……そうか？　ならいいんだけどさ。

そうそう。で、鈴木さんの家って、物凄いつて程でもないけど、そこそこのお金持ちらしくてさ、小学校に入る前からずっと英才教育みたいな感じで、色んな習い事とかさせられてたみたいなんだよ。

うん。でも、彼女は清澄さんみたいに凄い才能とかがあったわけじゃないし、どっちかっつーと呑み込みは悪い方だったんだ。……それでも彼女は頑張ってた。それは親の期待に応えるためとかじゃなくてさ、なんつーか、彼女自身が楽しかったからみたいだったな。彼女は努力家。それも、楽しんで努力できるタイプみたいだった。それで彼女は努力して、努力して、色んな知識や技術、能力を身につけていった。

そうだな。だから、万能と言っても、清澄さんとは全く違うタイプの万能なのかもしれない。

——え？　うーん……今の彼女が正直どうなのかはよく分からないけど……でも、あんなだけ俊足のおまえから逃げ切れなかったことは、少なくとも運動能力の面では清澄さんと張れるかもしれないな。

ああ……。それは……いつからかはよく覚えてないんだけどさ、小学校で鈴木さん、少

しずつ浮き始めたってんだ。そりやそうだよな。一応、私立の小学校だったから頭のいいやつはそこそこ多かったけど、その中でも鈴村さんは突出した能力を身につけていったんだから——。

いや、別にイジメられるようになったとかじゃないんだけどさ、なんていうか、こう、クラスの輪に入れなくなってたんだ。皆が鈴村さんのことを、一歩も二歩も引いて見るようになって、彼女との接し方にもどこか隔たりがあるようになって——。それと同時に、鈴村さんの方からも皆から離れるようになっていった——。それで、いつの間にか、彼女は今みたいに、何事に対しても無気力になっていた……。

……ああ、そうだな。まさに鈴村さんの三大口癖。「興味ない」「面倒」「つまらない」
だな。

うーん……。どうなんだろう？ 正直、自分でもよく分かんないだよな。

ああ、そりやそうだ。鈴村さんが楽しそうにしてるとこなんて、もう何年も見てないからな。

——前例？ なんのこっちゃ？

ははっ。おまえがそう言うのと、なんかホントに何とかかなりそうだから凄いな。

◆

私は電車に揺られながら、窓の外を流れる住宅街をぼんやりと眺めていた。努力なんてしないで万能になった栞。

努力に努力を重ねて万能になった朱莉。

二人が辿った道は全然違っていて。

そうして二人が辿りついたところは似ているようで、やっぱり違っていて。

でも、二人はどこか似ていた。

ふと、いつかの、暗い寂寥感せきりようかんを瞳に浮かべた栞の顔を思い出した。

直後、さっきの、明るい充足感を顔一杯に浮かべた栞を思い出した。

「——今が楽しいから……か」

私はとても小さな声で独り言ちた。



——いつからだろうか。

この酷く曖昧あいまいな世界で、闇に溶け込みそうになりながら、過すごしているのは、それは、とても遠いようで、とても近いようで――。

わからない。

思い出せない。

何も――。

私は誰なのか。

私はなぜここにいるのか。

――記憶が、濛昧もうまい。

手を伸ばせば届きそうで、でも、全然届かなくて。

私自身が、巨大な霧の世界の中心にいるように、不確かで、不安定で。

そこから抜け出したくて、歩こうとして、走ろうとして、もがこうとして。

でも、身体は思うように動かない。まるで、自分の身体ではないかのように――。

「はあ……」

苦渋と諦観が混じった吐息といきをつきながら、ゆっくりと目を開いた。

いつものベッドの上。

遠い感覚。

沈み込んでいくようで、浮き上がっていくよう。

暗く、静謐せいひつな部屋の中で、孤独に包まれ、夜をたゆたう。

「――」

なんとなく、天井に向かって、右手を伸ばした。

何があるわけでもない。何が掴めるわけでもない。

でも、そのまま右手をギュツと握りしめて、感じた。昨日よりも、ほんの少しだけ、感覚が近くなっているような気がする、と――。

だけれど、「気がする」だけで、それはやっぱり気のせいなんだろう。もし、気のせいじゃないとしても、単なる偶然か何かだ。人間、誰だって体調がいい日があれば悪い日もある。まあ、私の場合、いつもが悪すぎるのだけれど――。

私はゆっくり身体を起こして、机の上に置いてある小さな球体のデジタル時計を見る。暗闇の中、ぼうつと青白い光が今の時刻を告げている。

――午前、一時十二分。

深夜だ。とても深夜だ。

でも、朝までは、まだ長い。まだまだ長い。長すぎる。

眠るでもなく、何をするでもなく、ただ暗澹あんたんと過ごすには――。

「退屈……」

つぶやいて、厚い布団の中で両膝を抱え込む。

今日も、外は寒いのだろうか。

今日も、あの川の水は冷たいのだろうか。

——思い出す。

どこか別の世界の出来事のように、北風を遠くに感じたこと。水の流れを遠くに感じたこと。

そして、彼、高浜君と会ったこと。

倒れそうになって、支えられたこと。抱きとめられたこと。

少しだけ、言葉を交わしたこと。

きつと……美月が大好きな、彼と——。

そう、やるからには、徹底的に、ね。



「ふあくあ」

朝、駅のホームで電車を待ちながらあくびを一つ。

寝不足、というわけではないんだけど、なぜか今朝はいつもより眠い。しこたま眠い。人も疎^{まば}らなホームを冷たい風が吹き抜ける。

「うろうう……。寒……」

うーむ……。きつとこの眠気は寒さの所^{せい}為^いだ。身体^{からだ}が、本能が冬眠を求めているのだ。そうだ。そうに違いない。

「ふあくあくあ」

さつきよりも一段と大きなあくびが出た。

もしここに葉がいたら、「女子高生が朝っぱらからそんな大あくびしてちゃダメでしょ。」

そんなの全然萌えないよ」とか何とか言われていたことだろう。でも、今はそばに栞どころか知り合いすらいないから何の問題も――。

「よう。おはよう」

「ひうつ!？」

いきなり背後から声をかけられつつ頭に手を置かれて、私はビクツと震えた。

「あ、やっぱ驚いた」

聞き慣れた声。振り向くと、そこには笑顔の高浜君がいた。

「そりや驚くわよ! 背後から気配もなく近づかないでよ! なによ? 忍者なの? 隠密なの? スネークなの?」

「いやー、俺にそんなステルス機能はないはずなんだが……」

むう、と唸りながら、彼は左手で後頭部を搔く。彼は困ったり悩んだりしたときに、よくこの仕草をする。流石きすがに二年近くも同じクラスにしていると、こういう癖とかも段々分かるようになってくるものだ。私と彼の家は結構近くて、使う駅も同じだから、朝こうして一緒になることもあるし――。ただ、彼はバスケット部の朝練で早く出る日が多いから、ここで会える日はそんなにはないのだけど。

「あれ? そういえば、今日って朝練ない日だったっけ? いつもは火曜日も朝練あった

「ような——」

「んー、そうなんだけど……。今日は、なんつーか、女子に体育館を乗っ取られたんだわ」
彼は、やれやれ、といった感じで肩を落とす。

「女子に？ でも、女子バスケット部だけじゃ持て余すくらいウチの体育館って広いじゃない」
なにしろ、バスケのフルコート六面分の広さがあるのだ。大抵そのうちの二面はバレー
ボール部が、二面はバドミントン部が使ってるけど、それでも、残りの二面はバスケット部が
使える。女子バスケット部は、確か全員で十七人だから、一面あれば十分な気がする。

「実は昨日の放課後に……」

高浜君はそこまで言って、「ん？ 待てよ……」とか小声で言いながら、何かを考え始
める。

「うーん……」

腕を組んで、真剣に何かを悩んでいる。

「あの一、高浜くーん？」

「おお！ そうか！」

高浜君は突然、犯人が分かった名探偵のような顔で、私に告げる。

「やっぱ教えない」

「なんでさっ！」

おもわず久しぶりに全力でツッコんでしまった。

私は当惑しつつ、不敵な笑みを浮かべている彼に尋ねる。

「あー、あれだけ悩んだ挙句、その回答が『教えない』というのは、どういうことなんですか、高浜祐樹さん……？」

「いやー、その方が面白いと思って」

「はあ？」

意味が分からない。全然、意味が分からない。

「私に教えないと何が面白いのよ？」

「それはだな——」

彼は徐おそむろに自分の左手の腕時計を見ながら言う。

「ま、学校に着けば分かるさ」

「それってどういう意味ー？」

「はは、気にするな」

「むう……」

——それから電車が来るまでの数分間、ずっと問い詰めてみたけど、結局彼は何も教え

てくれなかった。



通学時間というのは、すなわち通勤ラッシュの時間でもあるんだけど、私たちが乗る駅までは結構すいている。とはいえ、席が空いていることは稀まれで、吊革につかまっただけの日が多い。そして、次の駅からどんどん人が乗ってきて、二駅先で見ても完全無欠な満員電車が完成する。

今日も空いている席はなかったから、私たちは車両端の優先席の前に並んで立った。もうこの位置にいる必要はないんだけど、どうもここにくるのが癖になっているようだ。

ふと、この電車のこの位置で、彼と初めて会ったときのことを思い出して、ふふ、と笑いが漏れた。そんな私を、彼は不思議そうに見ていたけど、すぐに同じことを思い出したのか、はにかむような笑みを浮かべた。

——あれは、今通っている高校の合格発表日の朝だった。

発表開始時間が午前九時だったから、私が電車に乗ったのは見事にラッシュ時間の真っ只中だった。

今は全然そんな症状はないんだけど、そのころの私は時々不整脈が出ていた。両親は共働きだったけど、入学試験の日はそれを心配して、母親が仕事を休んで付き添ってくれた。その合格発表の日も母親と一緒に来てくれると言ってくれた。でも、症状が出る頻度は減ってきていたし、なにより、合格したら毎日通うことになるのだ。それなのに一人で行けなくてどうする、と私は母親の申し出を断った。

ところが、電車に乗ってから二駅目を過ぎ、満員状態となった車内で、不意に不整脈に襲われた。

——まず、明らかに鼓動が遅くなるのを感じた。そしてすぐに息苦しくなり、そのまま世界が遠のいていくような感覚になった。

「ああ——」

手が吊革から滑りぬけ、そのまま横に倒れそうになったけど、そこは満員電車の中。ほんの少し傾いただけで、隣に立っていた人にもたれかかる形になった。

「ん……？ ……あ、あの、大丈夫？」

その人が動揺しながら声をかけてきた。

それが、高浜君だったわけだ。

「……大丈夫……じゃないかも……」

私は少し遠のく意識を引きとめながら、言葉を紡ぐ。

「でも、コレ……たまにあることで……少ししたら良くなるから……」

「そうは見えないぞ！ 顔色凄く悪いし——」

私は目を閉じているから、彼の表情は窺えない。でも、その声から察するに、かなり慌
てているようだ。

「……次の駅で降りて……休めば、きっと、大丈夫……」

どうにかこうにか言葉を紡ぎながら、自分でもかなり呼吸が荒くなっているのが分かる。

「でも、相当辛そうだぞ……」

そこで、彼は何を思ったか、突然、超真剣に叫ぶ。

「——誰か、この中にお医者様はいませんか!？」

おいおい。ここは重病人がいる飛行機の中かよ。

もう声を出すのが辛すぎたから、心の中でそうツツコンでおいた。

ざわ……ざわ……と、どこかのギャンブル漫画の如く車内がざわめき立つ。

あー、あんま大事おおごとにしないほしいんだけどなあ……。

そう思ったのも束の間。次の駅に着いた。

私は彼の肩を借りながら、一緒に電車から降りる。そして、すぐそばにあったベンチに

腰を下ろした。

呼吸を整えながら、高速で伸縮を繰り返す心臓が落ち着くのを待つ。

彼は私の隣に座って、無言で背中をさすってくれる。

いや、嘔吐しそうな酔っ払いじゃないんだけど……。

——それでも、何か心を落ち着かせる効果があつたのか、いつもより早く不整脈がおさまってくれた。

「……ありがと。ずいぶん良くなった」

「そう……か？ でも、まだ顔色悪いけど……」

と、俯うつむいている私の顔を覗き込んで——。

「うわ。凄い汗」

言われて、自分の顔が、いや、全身が冷や汗でびっしりになってるのに気づいた。その所為で、体温がかなり低下しているように感じる。

「——まあ、いつものことなんだけど……」

自嘲気味に言って、大きく息を吐いた。

「ちよっと待ってる。今、拭いてやる」

「いや、それくらい、自分で——」

「いいから、じっとしてろ」

「……………はい」

やっぱりまだ動くのが辛かったから、彼の言葉に甘えることにする。

彼は水色のハンカチを取り出して、私の顔を優しく丁寧に拭いてくれた。

なんだか少しこそばゆくて、少し心地よかった。

「こんなもんでいいか？」

「ん——ありがとう」

かなり体調が回復してきたから、彼の方を向いて、言うことができた。

そのあと、空を仰ぎながら、ボソツと弱音を漏らす。

「——ああ、でもこんなんじや、合格してても、毎朝通うの不安だなあ」

「ん？　もしかして、今日合格発表の——」

「そうだよ……………って、もしかしてあなたも？」

「ああ。……………なんだ、じゃあ大丈夫だ」

「へ……………？　何が？」

「俺もおまえも受かってたら、毎朝一緒に通って、おまえに何かあったら、俺が助けてあ

げるからさ」

彼は平然とそんなことを言っただけだ。

「あ、ありがと……」

言いながら、自分の顔が赤くなってるような気がした。

「……でも、もし私が受かって、あなたが落ちてたら？」

「ぐあつ!! 一番あり得そうだけど考えないようにしていたことをつ!!」

彼は頭を抱えてうなだれる。

「い、いや、大丈夫だよ、きつと」

咄嗟とつぜんに根拠こたのかけらもないフオローを入れる。が――

「あうう……」

彼の心は完全に折れているようだった。

「ほ、ほら、結果なんて見てみなきゃ分かんないんだからさつ。二人とも受かってるかも

しれないし、私だけ落ちてるかもしれない……って、それは嫌だー!!」

今度は私が頭を抱える。

「……おまえ、元気だな」

「や、おかげさまで――」

「じゃあ、合わせて『頑健』^{がんけん}ってことで」

「それだと私が『無茶苦茶強い』みたいに聞こえるんだけど……」

「まあ、いいことじゃないか。頑丈で健康。結構結構」

なぜか拳を掲げながら言う。

「おかげで俺は何の心配もなく朝練に没頭できるわけだし」

「あ……」

そういえば、高校一年の始めから数ヶ月、彼はバスケット部の朝練に一度も出ずに、本当に毎日私と一緒に登校してくれた。少し私の顔色が悪かったりすると、彼は優先席に座っているサラリーマンを無理矢理どかせて、私を座らせてくれたりもした。そのおかげで、体調がとても悪くなるようなことはなかったし、少しずつ不整脈も出なくなっていた。七月の頭くらいになると不整脈が出ることはほぼゼロになっていて、全力で運動しても何の問題もなかった。だから彼に、もう付き添ってくれなくても大丈夫だと伝えた。それなのに、彼は「心配だから、一応——」と言って、結局夏休みに入るまでは毎朝一緒に登校してくれた。

「——その節は本当にお世話になりました」

私はシュタつと敬礼する。

「なんだよ、急にかしこまって。気持ち悪い」

彼は顔を強張^{こわば}らせながら、私から一步離れる。

「気持ち悪いとか言うなー!!」

私は頬を膨らませながら、彼に一步近づく。

「だいたい、おまえが殊勝な態度になるのはほとんどが体調悪いときだから、そういうことと言われると逆に心配になるんだよ」

「えっ? そう、だっけ……?」

全く自覚のない私に、彼はグツと顔を近づけてきて言い放つ。

「そっだ。これまでのことをよく思い出してみろ」

「うーんと……」

言われるがまま、高校入学時から今までの記憶をトレースする。

「——あー、確かにそうかも」

「だろうが」

「でも、私だってたまには——!?!」

反論しようと彼の方を向いて、凄く近くに彼の顔があることに気づいた。

そりやもう互いの呼吸が感じ取れるくらいの至近距離だ。

「……………」

「……………」

私は——たぶん彼も——どうしていいか分からず、そのまま固まる。

おまけになぜか周囲の雑音も聞こえなくなり、時が止まったような感覚に陥る。

……ザ・ワールド？

違うっ!!

頭の中で謎の葛藤が巻き起こっていた。

「やーやーお二人さん。今日も朝からお熱いではないか」

「ひうっ!？」

「なっ!？」

突然後ろから声をかけられて、私と彼は瞬時に強力な磁石の同極になったような勢いで離れる。

「うーん、見事な飛び退きっぷりだねー。ということは、きっと二人はさそり座だなっ。

そんなさそり座の二人の今日の運勢は——」

この無駄にハイテンションで意味不明ことを言っているのは、同じクラスでバスケット部キヤプテンの来栖啓くるはしめ。クラスで一番の変人だ。

「俺はしし座だ」

「私……おうし座なんだけど」

とりあえず私たちは努めて冷静に返答する。が――

「なんと、21点、33点、28点で合計82点のパーフェクトな一日っ!!」

――キャプテンは全く聞いていなかった。

「そのどこをどうとつたらパーフェクトになるんだよ！」

相手をしていると疲れそうだから、私はツツコミを放棄する。

頑張れ高浜君。

「それに、それぞれ何の点数だか全然わからんぞ」

「ふむ。ということは、今日の俺の恋愛運はバラ色だなっ？」

キャプテンはウインクをしながら言う。その百八十センチ以上ある巨軀きよくには全く似合っ

ていない。や、むしろ……キモイ……。

「……頼むから、せめて会話を成立させてくれ」

早くも高浜君の心は折れかけていた。

「なるほど、なるほど。それにはまず、この数千年後の世界史の教科書のように分厚い言

葉の壁を取り払わなければなるまいて」

「薄々勘付いてはいたが、やっぱりお前が喋ってるのは日本語じゃなかったんだな？」
「どうやらコミュニケーション・ブレークダウンが発生していたらしい。」

「よしよし、ではエスペラント語で話そうじゃないか」

「無理だっ」

「えすぺらんと？」

「知らない言葉が出てきて、つい口を挟んでしまう。」

「どっかの言語学者が作った人工言語だ。人工言語の中では一番使われてるらしいが、この国でエスペラントを話せる人なんて人口の一パーセントにも満たないだろうよ」

「へー」

「私に至っては、話せるどころか、そんな言語があることすら知らなかった。」

「ふむ。ということは、今日の俺の恋愛運はバラ色だなっ？」

「キャプテンウインク再び。」

「だからどうしてそうなるっ!？」

「いやいや、話が逸れていたから修正したまでさ」

「誰の所為だ、誰の!」

「んー? 佐々岡?」

「わ、私っ？」

いきなりキャプテンに指を差されてたじろぐ。

「アホだ。こいつ……絶対にアホだ……」

高浜君は頭を抱えながら言う。

「お前がアホだということは十二分じゅうにぶんにわかったから、話の続きをしてくれ。このままでは一向に話が進まない」

「おーけい、おーけい。そこまで言うのなら仕方ない。今までの話の流れからも分かるようにだ——」

や、話の流れからは何も分からない、と言いつつになつたけど、そんなこと言ったらまた話がややこしい方向へ行きそうだから、私は出かかった言葉を必死に飲み込んだ。

「実は、佐々岡に相談があるのだよ」

「……………え？ 私？」

先の言葉を飲み込むことで一杯いっぱいになっていて、自分に話の矛先が向いていることに気づくのに少々時間がかかった。

「そうだ。佐々岡は清澄葉と親密なようだな」

「え、ああ……………まあ……………」

話の流れが掴めず、返事が曖昧になる。

「ふっ。しらばつくれても無駄だぞ。ネタは上がってるんだ」

「ネタ……？」

そもそも、私はしらばつくれるつもりなんてないのだけれど。

「昼休みに二人で密会したり——」

「一緒に昼飯食ってるだけだろ」

「休日に二人で出掛けて狭いプライベート空間でツーショット写真を撮ったり——」

「それはプリクラだな」

「更には、二人で薄暗い部屋に入り、あーんな歌やこーんな歌を——」

「それはカラオケだ！」

一つひとつ高浜君がツツコミを入れていく。疲れるだろうに……。

「——そんな都市伝説が」

「都市伝説かよっ」

「む？ 学校の七不思議だったか？」

「七つもなかったし、そもそも『不思議』じゃねーよ！」

「まあ、そんなこんなで、佐々岡美月は清澄菜と親密であるというわけだ」

勝ち誇ったような顔でワハハと笑うキャプテン。

「……分かったから、もう好きにしてくれ」

あ、高浜君が諦めた。ということとは、ここからは私がこの変な生命体の相手をしないと
いけないのか。……それは何というか、途轍とてつもなく面倒だ。

「そんな佐々岡に相談なんだが——」

ああ、ようやく話が戻ってきた。

「——清澄と仲良くなるにはどうすればいい？」

「え……………」

あまりにも想定外の質問に私の頭は完全にフリーズした。

キャプテンはそんな私を真まっ直ちぐに見据みえて繰くり返す。

「だから、清澄と仲良くなるにはどうすればいい？」

「えっ？ えっ？ なに？ 全然話が見えないんだけど——」

私は助けを求めるように高浜君の方を見るが、彼は小声で「ぼえー」とか言いながら、
虚ろな目でどこか遠くを見ている。……どうやら力尽きているようだ。

「だ・か・ら、清澄と——」

「うわっ！ 顔が近い、顔がっ！」

無駄に接近してきたキャプテンから飛び退きながら尋ねる。

「つていうか、なに？　なんで急にそんなことを——？」

「ふむ。簡単に言うと、だ」

そこで彼は思いつきり胸を張って得意げに言う。

「清澄に惚れた」

「……………はい？」

私の頭はさっきの二倍くらいの時間フリーズした。

「だから、清澄に惚れた」

……………。

「なあにいいいい——っ!？」

「なんだとおおお——っ!？」

私と高浜君は往来の真ん中で同時に絶叫する。

「——ねえ、もしかして、来栖君って——？」

「いや、俺もそれは知らなかったんだが、あの清澄さんに惚れるってことはやっぱり——」

「おいおい、何を二人でヒソヒソ話してるんだ？」

「……………あの、来栖君って——」

「……なあ、お前って——」

「なんだ？」

「ロリコンだったの!？」

「ロリコンなのかつ!？」

私たちのセリフは完璧にハマっていた。

すると、キャプテンは急に神妙な顔になって、小さく頷く。

「……なるほど。哲学的な話か」

「どこがっ!？」

「たとえ同じ年齢だとしても、その容姿が小中学生並の相手を好きになった場合、それをロリコンと言うのか否か。そもそも『容姿』と言っても問題となるのは身長なのか、顔つきなのか、バストサイズなのか——。いや、待てよ、バストサイズよりもむしろトップとアンダーの差の方が問題に——」

なにやらキャプテンはロリコンについての考察を始めてしまった。そんなことは今考えなくてもネット上の掲示板とかで嫌と言うほど語り尽くされているだろうに。

だが、キャプテンが真剣に考え込んでいるこの状況は——。

「高浜君、高浜君」

私は小声で話しかける。

「ん？」

「チャンス、チャンス」

クイクイと親指で学校の方を指す。

「……ああ、なるほど」

私たちは小さく頷き合うと、

「せーのっ」

ダッ、と同時にスタートを切る。

「——つまり、胸の大きさとは、そこに夢が詰まっているかどうかではなく……って、どこへ行くー!? まだ俺の話は終わってないぞー!!」

叫びながら物凄い勢いで追ってくる。

うおっ!? 流石はバスケ部キャプテン、瞬発力は伊達^{だて}じゃない。

校門を通ったところで、高浜君が提案してくる。

「二手に分かれよう！」

「了解っ！」

今にも追いつかれそうになっていて、まともな思考時間がなかったから、即答する。そ

のまま私たちは弾けるように二手に分かれて逃げる。が、少し冷静に考えてみると――。
「はっ!? いま来栖君に質問されてるのは私だから、追われるのって確実に私じゃん！」
案の定、キャプテンは迷うことなく私の方へ――。

「まてーい、高浜ー!!」

来てないしっ!!

アホで助かった。

「ちよっ、お前の聞きたいことがあるのは俺じゃないだろー!!」

ああっ！ 高浜君が裏切った！

「――はっ!? しまった！」

と、キャプテンは急ブレーキをかけて、すぐに目標を私に移す。

でも、今ので随分と距離が開いたから、なんとか逃げ切れそうだ。

「……あれ？ でも、いつまで逃げればいいんだろ？」

キャプテンとは同じクラスだから、今こうして逃げても、あまり意味がないような……。

いや、考えるな。考えるんじゃない、私！

とにかく、ホームルームの時間まで逃げきって、有耶無耶うやむやにしてやる。

とはいえ、このまま走り続けるのも正直だるい。

「——だったら！」

校舎の角を左に曲がり、すぐ右手にある体育館に逃げ込む。

体育館の倉庫にでも隠れよう。あそこなら、もし見つかっても、なんとか外に出れるくらいの大サイズの窓があるから、そこから逃げればいい。

と、キャプテンから見えていないうちに体育館に入り、そのまま一目散に体育倉庫に駆け込もうとして——。

「ほえっ——？」

私の足は、液体窒素にどっぷり浸かったかのように、瞬間凍結した。

「し、しおり？」

なぜかそこには、上下白のジャージを着た栞がいたのだ。

「お？ あー、おはよー、美月ー」

栞は完全に私の方を見ながら、スリーポイントラインの外で軽く足を浮かせてバスケットボールを投げた。

「どつたの？ こんなとこに来てー？」

投げたボールの行方すら見ずに、私の方へ駆け寄ってくる。そして、なぜか私の前で小さくジャンプして、ちよこんと着地する。それと同時に——。

——スパン、とボールがゴールに吸い込まれた。

「美月？ どしたのさ、そんな呆気に取られたような顔して——」

「みーつーきー」

栞が私の顔の前でぶんぶんと手を振る。

「あ、あのさ、栞——」

「なあに？」

「あんだ、なにやってんの？」

「あれー？ 見て分かんない？ バスケットの練習だよ。ウチのクラスの女子全員でねー」

「——」
絶句している私のことはお構いなしに、栞は笑顔で続ける。

「いやー、美月のクラスも昨日の昼に練習してたんでしょ？ ならウチも負けてられないなーと思ってねー。で、どうせやるなら広い方がいいなーと思って、今日はちよつと男子バスケット部の面々には休んでもらったのさー。実力で——」

「……え？ 実力？」

「そう、それがね——」

「ねえ、栞ー。女子バスケ部と練習試合しな〜い？」

と、八組の女子が会話に割り込んできた。

「あー、それいいねー。そろそろいい感じに身体もあつたまつてきたし〜
くい、くい、と身体を左右に捻りながら栞が答える。

「じゃ、また後でねー」

「あ、ちよつと、話がまだ途中——」

引き留めようとした私の台詞が終わる前に、栞はもうコートを中心まで走り去ってしまった。
っていた。

「足、速すぎ……」

「な？ 女子に乗っ取られてるだろ？」

「うわっ!? って、高浜君——」

体育館の入口付近で一人ぽつんと取り残されていた私の横に、いつの間にか高浜君が立
っていた。

「どうして、ここに——？ とうか、来栖君はどうしたの？」

「ああ、ヤツなら、そこで昇天している」

「は？」

彼が指さした先を見ると、体育館の外でキャプテンがうつ伏せに倒れてピクピクしている。

と――。

「ふおおおおっ!?!」

いきなり奇声を上げて、クネクネ動き出した。

「のああああっ!?!」

クネクネが激しくなる。

「……高浜君、なにをしたの?」

「いや、ちよつと、肩こりに良く効くツボを押しただけだ」

高浜君は変な技能を持っていた。

「……それだけで、あの有ありさま様なの?」

「むっほおおおっ!?!」

クネクネ、クネクネ――。

「よほど肩こってたんだな」

「そんなバカな。あれはただの変態――」

っていうか、普通にキモい。

「はっは。辛辣しんらつなお言葉なことで」

——スパン。

「……………」

栞のスリーポイントシュートがゴールに吸い込まれていた。

「……………そういえば、さつき栞が男子バスケ部に『実力で』休んでもらった、とか言ってたけど、それってどういう意味？」

「ああ、結構前のことなんだけど、そこでクネクネしてる、おまえが言うところの変態が清澄さんにワンオンワンを挑んで負けたんだ」

「よくあることね」

ありすぎて困るくらいだ。まあ、私に実害があるわけじゃないからいいんだけど。

「まあな。で、その勝負の前にした約束が、『負けの方が勝った方の言うことを何でも一つ聞く』ってやつだったんだ」

「またベタな約束を——」

「でも、勝った清澄さんはずっとその権利を使わなかったんだけど……………昨日の夜、来栖ちん家に清澄さんから電話があつて、いきなり『明日の男子バスケ部の朝練を中止して』とか言われたらしい。で、来栖から男子部員全員に今日の朝練は中止という連絡が回ってきた

わけだ」

「なるほど」

納得だ。納得なんだけど……。

「……あれ？ でも、なんでそれを今朝会ったときに教えてくれなかったのさ？」

「んー？ だって、その方が面白そうだったから」

そういえば、今朝もそんなことを言っていたような気がするけど――。

「面白いって……なにが？」

「おまえ、体育館入ってきて驚いたろ？」

「はあ。そりやまあ……」

「『ほえっ』とか言ってマヌケな顔して固まってたもんな」

「はああっ!? み、見てたの!？」

ボツと自分の顔が赤くなるのが分かる。

「うん。多分ここに逃げ込むだろうと思ったから、先回りして待ってた。いやー、実に面白いものを見させてもらったよ」

腰に手を当てながら、はっはっはっ、と高笑いする高浜君。

「~~~~~」

より一層自分の顔が赤くなっていってるとような気がした。



「や、やっと追い詰めた……」

学校の屋上。吹き抜ける北風が、今はオーバーヒートした身体をいい感じに冷却してくれる。

「なんで、私なんかを……」

逃げ道を失った朱莉が、フェンスに背中を預けて乱れた息を整えながらボソツと呟いた。

「まったく……この私からここまで逃げ回っておいて、なに言ってるんだか」

傲慢じゃないけど、中学の頃は陸上の短距離で学年トップクラスだったのだ。要するに、走りには自信があった。それなのに、朱莉はこの昼休みが始ってから結構な時間私から逃げ続けていたのだ。

「そんな体力とスピードを兼ね備えてる人材を放っておけるわけないでしょうが！」
ビシッと人差し指で彼女を差しながら、嘘偽りのない言葉を突き付ける。

「今朝、栞のクラスがバスケの練習してるのを見たのよ。したら、あっちには栞以外にも運動神経いいのが揃ってるし、女子バスケ部のキャプテンまでいるわけ」

他にも、バレーボール部のキャプテン、ソフトボール部のエースピッチャー、テニス部のインターハイ出場者、カバディ部補欠と多士^{たし}済^{せい}済^{せい}なメンバーである。というか、カバディ部に補欠がいる状態って、どんだけカバディ部人気なんだろうか……。

「……そう」

朱莉は私から目をそらして、完全に無関心な声で言う。

「でも、私には関係ない」

「あなたの力が必要なよ、八組に勝つためには」

「だから、私は別に——」

彼女の返答には耳を貸さずに、物理的な距離を縮めつつ、まくしたてる。

「朱莉が協力してくれれば絶対に負けない！ あの栞がいるクラスに勝ったとなれば、伝説として後世まで語り継がれるかもよ！ それになによりアレよ！ 八組に勝ったら空閑さんが駅前のあの店のチョコパフェを奢ってくれるのよ！ こんな甘くて美味しい素敵なお話はなかなか転がってないわ！」

マシンガンの如く説得の言葉を放ちつつ、朱莉に詰め寄る。

彼女は一応は私の方を見る。彼女は女子の中ではかなり背が高い方だから、自然、物理的に見下ろされる形になる。そして、いつもの虚ろな目で静かに答える。

「そう……。でも、興味ないから」

「……………」

冷たい風が、彼女と私の間を通り抜けた。

低い気温の所為か、彼女の冷たい言葉の所為か、ヒートアップしていた身体と脳が急速に冷めていくような、そんな感覚に襲われる。

「じゃあ……」

そう言つて、彼女は私の横を通り過ぎて行く。

これ以上、追いかけるつもりも、力尽くで引きとめるつもりもなかった。

ただ、私は立ち去ろうとする彼女の方へ振り返つて、とても冷静に、おんとう穏当に、一つの提案をする。

「じゃあさ、ちよつとした昔話を聞いてくれない？ 今日男子も一緒にバスケの練習するとか言つてたから、どうせ今戻っても教室には誰もいないだろうしさ」

「……………」

朱莉は歩みを止めない。

それでも、私は続ける。

「まあ、昔つつてもそんな昔の話じゃないんだけどね。……ある白くてちっこい万能少女の、中学生の頃の話」

それを聞いて、朱莉はピタリと足を止める。背中を向けたままだったが、それで十分。私は慎重に言葉を選びながら話を始める。

「中学生のときのその少女ってさ、雰囲気とか態度とかが今の朱莉に凄くそっくりだったらしんだよ」



——無口、無愛想、無気力。

それが、白くて小さな少女の印象だったらしい。

誰と会話することもなく、友達も作らず、授業中もずっと上の空。放課後になればすぐに消えてしまっている。そんな空気のような存在。少なくとも、少女はそうあるうとしていたのだろう。そして、クラスメイトは皆、少女を空気のように扱った。そこにあって、ないもののように。ただ一人の、例外を除いて——。

彼女には逆にその少女のことが気になって仕方なかったらしい。

彼女にはそれが意図的なものだとしか思えなかったのだ。

どうしてそこまでして空気であろうとするのか。

どうしてそんなに徹底して自分の存在を薄めているのか。

気になって気になって仕方がなかったのだ。

でも、それが本当に意図的なものなのか確信は持てなかった。だから、どうにかそれを確かめようとしたけど、とても難儀だった。何度その少女に話しかけても、「ん……」とか「別に……」とかそんな素っ気無い返事しか返ってこなくて、会話をすることすら困難だったからだ。

そこで、とりあえず彼女は少女を観察することにした。朝、少女が教室に入って来てからずっと……。授業中も休み時間も放課後も。あるときは少女の家まで尾行したこともあった。一歩間違えればストーカーだった。や、間違えなくてもストーカーだった。訴えられたら負けること間違いなしだった。

少女は彼女がつきまといていることに気づいているようだったけど、そ知らぬ顔をして無視を貫いていた。

それが、なんと数ヶ月も続いた。よく飽きなかったものだ。だけど、その間に彼女は幾

つかのおかしなことに気づいた。

まず、体育の時間、女子だけのチーム同士でミニサッカーをしていたときだ。狭いコートの中に十数人もいれば、どんなに運動音痴の娘のところにも一度はボールが行くはず。それなのに、その少女は一度もボールに触れなかった。パスされたボールをスルーしてたとか、そんなんじゃないやなくて、少女はコート内で常にボールが来ない位置に移動し続けていたのだ。彼女と少女が同じチームになったとき、彼女は少女にパスを出してやろうと思っただけで、彼女がボールを持った瞬間から、どんなに探しても少女が視界に入ってこなかった。仕方なく別のチームメイトにパスすると、それまで全く見えなかった少女が視界の隅でスッと移動した。少女はボールを持っている人の死角にずっといたらしかった。それだけでなく、相手チームがボールを持っているときも、どこにいればボールが来ないかわかるみたいで、常に変な位置へ移動していた。

あと、授業中、少女は教科書も開かず、ノートもとらず、頬杖をついてただぼうつと前を見ていた。教師の話も耳に入っているのかどうかすら怪しかった。それなのに、試験では全ての教科で70点台を取っていた。教科によって数点の差はあるものの、70点未満も80点以上も取ることはなかった。悪くはないが、凄く良いというわけでもない点数。あえてそこを狙っているとしたかと思えなかった。しかも、授業は全然真面目に受けていないのに、

それができていた——。

彼女は思った。

その少女は、本当は凄く運動ができて、凄く頭が良いんじゃないか、と。

なにかの理由で、そのことを隠しているじゃないか、と。

だとしたら、なんてつまらないことをしているんだろう。

彼女は人より少し運動ができて、速く走るのが得意。でも、ただそれだけ。勉強は得意じゃなかったし、得意の短距離走も、県で上位に入れる程のレベルではなかった。

だけど、その白い少女はきつと違うのだ。彼女よりも全然頭が良くて、彼女よりも運動もできて——。それを表に出せば、きつと凄く楽しいに違いない。それはもう嫉妬するほどに。

じゃあ、なぜその少女は——？

彼女は考えて、考えて、さらに考えて——。

そして、考えるのを止めた。

面倒になったのだ……きつと。

「ねえ、私と百メートル走で勝負しようよ」

「……は？」

放課後、彼女からいきなりそんなことを言われた少女は目が点になっていた。

「勝負してくれないならー、言い触らしちゃうよ。あなたが天才だってことを——」

「どうしてそ——」

そこまで言って、少女はしまった、といった顔をして口を噤んだ。

「ふっふっふっ」

鎌をかけることに成功した彼女は低い声で笑った。

「じゃあ、一度家に帰って、走りやすい服に着替えて、この地図の場所に来てね」

そう言って呼び出した場所は、乗用車一台がギリギリ通れるくらいのも、人通りもほとんどない静かな路地。

「ここは普段誰も通らないから、思う存分走れるよ。ちなみに、ゴールは大体百メートル先にチョークで線引いといたから」

「……どうして、こんなこと——」

「ま、いいじゃない。これでもしあなたが勝ったら——」

「もう私に関わらないで」

「……分かった。じゃあ、逆に私が勝ったら……んー、どうしよ。何も考えてなかった。まあ、その時に考えるわ」

「……そう。それで、スタートの合図は？」

「はい」

「……これは？」

「ビー玉。ほら、これを投げてアスファルトに落とせば、音が鳴るでしょ。それが合図」
「ん——」

「はい。あなたの好きなタイミングで投げていいよ」

「……分かった」

白い少女は小さく頷くと、その小さなビー玉を空高く放り投げた。

——結果は、白い少女の圧勝だった。

タイムで言えば、一秒近くは差があった。

彼女は泣いた。なんとなく負けることは分かっていたけど、それでも、涙が零れた。

それは、悔しかったというよりも——。

「——なんで、そんなに、なんでもないような顔してるのさ……？」

「え——？」

「勝ったこと、嬉しくないの？ あんなに速く走れて、楽しくないの？」

「……あなたには、分からないよ」

「なにが!? だって、速く走れるのって楽しいし、誰かに勝つのは嬉しいじゃない!」
「……なんでも分かって、なんでもできて、何もかもを誰よりも上手くこなせる。それって、逆につまらなくなってしまうんだよ」

「でも、あなたでも、オリンピック選手とかには勝てないでしょ?」

「そうね」

「だったら——」

「でも、今勝てないだけで、数年かければ、勝てるようになる。それが、明確に分かるとしたら? 普通はそれが分からないから、努力できる。どうすれば出口に辿り着けるのか分からない迷路だから試行錯誤できる。回り道をして、何度も行き止まりにぶつかって——。でも、その過程があるから出口に辿り着いたときの喜びがあるし、過程自体が楽しいのかもしれない。それがもし、出口までが、凄く短い一直線だったら、あなたは楽しいと思える? その出口まで行って、喜べる?」

「本当にあなた、何でもできちゃうんだね……」

「そう。だから——」

「ならいっそ、自分で楽しくしちゃえ!」

「は……?」

「出口が見えてるなら、いきなりそこ指すんじゃないよ、自分で分かれ道増やして、行き止まりたくさん作って、目隠しでもして、ついでにぐるぐるバットで千回転くらいしてからスタートすればいいじゃない。んで、ついでに色んな人をあなたが作ったその迷路に巻き込んだじゃえば、もつと楽しいよ、きつと」

「——なにその、馬鹿な発想」

彼女は初めてその白い少女の笑顔を見た。少しだけぎこちなくて、でも、自然と零れた笑顔を——。

「ああ、そうよ。私は馬鹿よ」

彼女は胸を張って言った。

「でも、少なくとも今はあなたより上手く笑える自信がある。本当にあなたが何でもできるって言うのなら、私よりも上手く笑えるようになってみせなさい。私よりも学校生活楽しんでみなさい」

「……………分かった。じゃあ、手始めに——」

言いながら、白い少女は彼女の手を握った。

「——あなたを巻き込ませてもらうことにするから」

私は、自分でも気づかないうちに閉じていた目を、ゆっくりと開いた。
すると、ちょうど朱莉がこっちに振り返った。

「——それで？」

「や、別に——。ただの暇つぶし的なお話。うーん……さすがに寒くなってきたし、そろそろ教室に戻ろうか」

冷え切った自分の身体を両腕で抱きながら、朱莉の横を小走りに、校舎内を目指す。

「体育館——」

「へ？」

朱莉の言葉に、私はピタリと足を止めた。

「体育館、行かなくていいの？ みんなまだ練習してるかもよ」

「んー、私は他にも説得しないとイケない人がいるからねー」

「そう。じゃあ、私は先に体育館行っているから——」

「え？ え？」

半ば諦めかけていたのだけど——。

「……勘違いしないでよ。私は単に、あの清澄葉とかいう女が鼻持ちならないだけ。天才だか万能だかだか知らないけど、ちよつと調子に乗り過ぎ。そろそろ誰かがあの鼻をへし折ってやらないとダメでしょ」

「——あ、ありがとう」

「べ、別に、お礼なんて言われる筋合いはないわ。私があの子をやっつけたいだけ。他意はないからっ」

朱莉は私からあからさまに目をそらしながら早口で言うと、早足で校舎内に消えていった。

私はそんな朱莉の背中を眺めながら、腕を組んで真剣に考えていた。

ああいうのを『ツンデレ』と呼ぶのだろうか、と——。



眠りから覚めると、そこは教室の中だった。もつと言うなら、授業中らしかった。

完全にぼやけている視界を両手でこする。……少し、視界がクリアになった。

黒板の上の丸い掛け時計を見ると、短い針が一と二の間に、長い針がちょうど八の上に

ある。これは、えーと……一時四十分か。どうもデジタル時計に慣れ過ぎている所為か、アナログ時計で時間を読むのに少々思考時間が必要だ。脳がまだ半分眠っている所為だという可能性もあるけど――。

ふと自分の机の上のノートに目を落として、うわー、と思う。ノートの上の方の文字は普通の日本語だけど、真ん中あたりから徐々に古代の象形文字のように形が崩れていき、下の方では形が崩壊していて、もはや読み取ることが不可能だ。この、限界ギリギリまで頑張りました感から、なぜか切なさを感じる。

それはそうと……どうも違和感がある。いつもと、何かが違う。変だ。何が――？
授業の真っ只中に目が覚めたことも変だけど、もっと致命的に、革命的に何かが、変だ。
うーん、と考えながら、何気なく両手で頬杖をつく。

――あれ？ 感覚が、近い？

昨日の夜も感覚が近くなっているような気はしたけど、それ以上に、確実に、自分の頬に触れている感覚が近くなっている。いつもなら、本気で意識を集中しないと感じなかった自分の手の温かさが、今は無意識でもなんとなく、本当になんとかなくだけど、感じ取ることができる。

私にとっての今までの当たり前がほんのちよっぴり当たり前でなくなっていて、みんなにと

つての当たり前をほんのちよっぴりだけ手に入れた、そんな感じ——。それは私にとって嬉しいことのはずなのに、なぜだろう、感じるのは喜びではなくて、小さな胸騒ぎだった。



放課後。私たちはついに千恵ちゃんを射程圏内に収めた。物理的な意味で——。

さて、後はどうやって千恵ちゃんを懐柔かいじゆう……もとい、説得するかだけだ。

「ねえ、美月」

うーむ、ここはやはりあの作戦で——。

「美月ってば！」

「しつ。あんまり大声出すと千恵ちゃんに気づかれるでしょうが」

隣で場の空気も読まずに私を呼ぶミッチーを小声で諭さとす。

「ここは図書室なんだから、そもそも大声なんか出しちゃダメな場所ですよ」

「そうよ、ここは図書館よ。まぎれもなく学校の図書館の本棚と本棚の間の狭い通路よ。

位置的にちよっと暗いわよ。で、どうしてこんなところにわたしが駆り出されてるのかって

ことを聞きたいわけよ」

私の耳元でどすの利いた小声でそんなことを聞いてくる。なぜだろう、小声になった方が怖いよミッチー……。あと、そのサイドポニーを首の動きで揺らしてぺちぺち地味に私の顔を攻撃するのを止めてほしい。

「うん。まあ、単刀直入に言う」と――

私は本棚の本と本の隙間から獲物を睨みながらその理由を告げる。

「私一人では千恵ちゃんを説得できる自信がないからだよミッチー」

「はあ……やっぱりそういう理由か……」

なにやらミッチーが自分の顔を片手で覆いながら、深い溜息を吐いている。

「ここまで来てそんな分かり切ったことを聞くから悲しくなるのだよ、ミッチー」

「わたしだって聞きたくはなかったわよ。でもね……放課後になるなり、突然拉致られて、口ふさがれたままクラスメイトの尾行に付き合わされて、ここでようやく解放されたと思ったら、自分をここまで強制連行してきたヤツが無言で本の隙間からクラスメイトを凝視してたら、誰だって理由くらい聞きたくなるわよ」

「いいねー。それが若さってやつだね。セイシュンだね。セイシュンなんだね。青い血と書いてセイシュンなんだね」

「青い血って何よ、青い血って！ 静脈血!? って、静脈血も別に青くはないしっ」

「うーん、それにしても千恵ちゃんは手ごわそうだなー」

「わたしのツツコミを無視するなっ」

なにやら隣が騒々しいけど気にしないことにする。

「——というわけで、ミッチー」

「……なによ？」

「千恵ちゃんを、説得してきて」

首を三十度ほど傾けて、ウインクしながら言ってみる。

「キモイ。そして断る」

ミッチーは全力で引いていた。

「えー、なんでさー。私的には大サービスしたつもりなのにー」

「そんなサービスはいらん。っていうか、何でわたし一人で行かなきゃいけないのよ。二人で行けばいいじゃない」

「ええー、二対一は卑怯だよー。ほら、空閑さんも言ってたよー。『ぐふっ！ ふ、二人がかりとは卑怯アルヨー』って」

「空閑さんに何があったの!? っていうか、空閑さん、『アルヨ』とか言わないし！」

「ちっ。バレたか……」

「バレるっつーの」

「分かったアルヨ。じゃあ二人で説得に行くアルネ」

「美月、頼むからそのキャラで説得しないでよ……」

「あいあい。そんじゃ、行きますか……って、あれ……?」

「ん……? あ……」

その時、私たち二人は深刻な事態に気づいた。それは――。

「千恵ちゃん、いなくなってるしっ」

「しまったー。無駄話しすぎたー。ミッチーの所為だぞー」

「八割方あなたの所為だと思っただけど、気のせい?」

「断固気のせい! 俄然気のせい! それより早く千恵ちゃん探さない」と

「あつ、美月、あそこに!」

「ホントだっ」

ミッチーが指差す先、図書室の出入り口のドアから千恵ちゃんがこっそり出ていくのが見えた。あれは追わなければ。是が非でも追わなければ。と私とミッチーは、良い子は絶対に真似してはいけない行為――図書室の中を全力疾走――をして、廊下に飛び出した。

「千恵ちゃん、待って!」

タッタタッタと小走りに逃げる千恵ちゃんの背中を一人で追いかける。と――。

「はうっ!？」

ステン!

「あ……」

千恵ちゃんが何も無い廊下の真ん中で、見えないロープに足を引っかけたかのようにコケた。それはそれは見事なコケっぷりだった。

それを見て、私は眉間みけんを抑えながら呟いた。

「あー。ツンデレの次は、ドジっ子娘か……」



その夜も私は暇だった。

それがいけなかったのだ。いや、美月が自分の日記を机の上に出しっぱなしで、しかも、開いた状態で置いたまま寝てしまっているのも原因の一つだと思う。私から「見たい」という好奇心を引き出すには十分すぎるシチュエーションだ。それに、普通に開かれている大学ノートが美月の机の上に乗っていたとして、それが美月のノートということは分かつ

ても、誰がそれを美月の日記だと読む前から分かるだろうか。

——などなど、彼女の日記の一部をまた読んでしまったことに対する罪悪感の中和を試みたけど、7対3くらいで、いや8対2くらいで私が負けていた……。大敗だ。大敗なんだけど……。ああ、ダメ、さつき途中までしか読まなかったから続きが気になって、どうしてももう一度見たくなくなってしまおう。

数分間の葛藤の末、自分の好奇心にも大敗して、結局続きを読むことにした。暗がりの中、小さな卓上スタンドの弱いオレンジの灯りだけで、彼女の今日の日記を途中から読み進める。

——ちなみに白だった。

私とミッチーは駆け寄って、千恵ちゃんを助け起こしてあげた。

私が「八組に勝ちたいから、千恵ちゃんにも協力してほしい」と言うと、彼女は悲しそうな、すまなそうな顔で「私、凄い運動音痴なので——」とだけ言って、トボトボと歩いて行ってしまった。私もミッチーも、彼女を引き留めることは簡単にできた。でも、しななかった。や、できなかった。彼女にかける言葉が見つからなかったからだ。説得する方法に見当がつかなかった。例えば、私たちが彼女に「楽しいから——」とか「千恵ちゃん

力が必要だから——」とか言っても全く説得力なんてないだろう。

でも、彼女の協力は絶対に必要だ。彼女だからこそできることがある。練習すれば、彼女は大きな戦力になる。球技大会までに練習できるのは明日と明後日だけ。だから、なんとしてでも明日こそは彼女を説得しないと。

見開き一ページに文字だけがびっしり書かれた今日の日記はそこで終わっていた。

よくこんなに長い文章が書けるものだと感心する。

しかし……この千恵ちゃんという娘、何もなくてここで転ぶなんて、まるで私みたいだ。いやいや、そんな比較は彼女に対して失礼だ。運動能力は私の方が圧倒的に下だろう。運動音痴で私に勝てる人などほとんどいないはずだ。私は普通に歩くときですら、意識の大半を両足に集中させないと、簡単に転んでしまう。

そう。だからあの日の夜、裸足で川の中に入っていったのは、冷静に考えれば、相当危険な行為だったのだ。でも、あどきに高浜君に会えて——。ん？ そういえば、あれはいつのことだったっけ？

昨日？ 一昨日？ 一昨昨日？ それよりもっと前？

……思い出せない。どうやら私は運動能力だけじゃなくて、記憶能力も破綻しているよ

うだ。なんかもう色々絶望的だ。

美月の日記を眺めながら思う。

私も、日記でも………書く気にはならない、な。

美月とは全然違う、何も起こらない私の単調な毎日を文章にしたところ——。いや、文章にすらならない気がする。数分悩んだ末に一言書いて終わり、といったところだろう。

……虚しい。

考えていて、この上なく虚しくなった。

世界から遠ざけられている私。

世界を遠ざけている私。

誰からも干渉されず、誰にも干渉しない。

いや、「誰も干渉できず、誰にも干渉できない」と言った方が正しいか。

まあ、どちらにしても、これまでにたった一人例外がいたわけだけど。だから、あれは私にとって色んな意味で衝撃的な出来事だったのに、それがいつのことだったかすら思い出せないとは、なんという記憶力だ……。

ふう、と溜息を吐いて、唐突に思い立った。

ちよっと外に出てみようかな、と——。



適当な私服に着替えた私は静かに家の外に出た。時刻は二十三時を少し過ぎたところで、親も寝静まっているようだったから、状況的には楽だったのだけれど、身体能力的には大変だった。主に靴を履くという作業が――。

下駄箱から取り出したのは、いわゆる普通の白いスニーカーだったのだけれど、右足の紐がほどけかかっていることに気づいて、歩いている途中でほどけたら危ないと思い、結び目を固くすることにした。……したのはいいのだけれど、私は何を勘違いしたのか、蝶結びの輪になっている部分ではなく、二本がそれぞれ単独で伸びている方を思いっきり引張ってしまったのだ。もちろん、紐は綺麗にほどけた。それから小一時間、とまではいかないけれど、手の指先の感覚も遠い私は十五分くらい靴紐と格闘していた。私にとってはちよつとした知恵の輪だった。

まあ、そんなこんなで見事に出鼻を挫くじかれた。でも、むしろそれによつて「思う存分の夜道を歩き回ってやる」という気分になった。

外に出ると、街は完全に眠りについていて、人っ子一人いなかった。所々にある街灯が無言で自己主張しているだけ。「閑静な住宅街」という言葉がとてもよく似合っている。

そんな中をたった一人でぽつぽつ歩く。

——ああ、なんというか、とても新鮮な気分だ。夜とか闇とかは私にとって慣れた日常だけれど、この夜の街、外の空気、一人で歩くという行為、そういったものが私の心をフワフワさせる。アスファルトを踏みしめている感覚も凄く遠いし、時折サーッと吹き抜ける風の冷たさも、私の感覚ではあまり感じられないけど、それでも、部屋の中でただ天井と睨めっこしているだけよりは数百倍楽しい。スキップでもしたくなるくらいだ。まあ、そんなことをしたら確実に転ぶだろうけど。いや、むしろスキップなんて高度な技、できる気がしない……。

それでも、歩き始めたときよりは、気持ち早足になっているようだった。

——大した距離ではなかったと思う。適当に歩き廻っていたら、見覚えのある川原に着いていた。

いつかのあの日と変わらず、さらさらと流れる水の音。私以外誰もいないその場所では、その川の流れる音だけが——。

タッタッタッタッ。

——お、や？

誰かが軽快に地面を蹴って走る音が聞こえる。こんな夜中にジョギングだろうか？ 奇

特な人もいたものである。いや、こんな夜中に散歩してる私がそれを言うのは、自分のことを棚に上げているようで、何か違う気がする。

どうやら、その走る音は私の方に向かってきているようなので、視線をそちらに移すことにする。

「——あ」

「——お？」

ぼったり、という表現が正しいのだろうか。まあ、「まったり」でなければ、「もっさり」でもないことは確かだろう。

「こんな夜中に何してんだ？」

ジャージ姿の高浜君は見事に自分のことを棚に上げて、シレっとそんなことを言う。でも、よくよく考えてみれば、私が何をしているかなんてことに、さして興味があるわけでもないのだろう。挨拶みたいなもの……というか、会話の糸口、切っ掛けのための一言。

例えば私が「ただの散歩よ。そういうあなたは？」とか言えば、話はつながるわけだ。そうか。しかも、単に「何してんだ？」と聞くのではなく、「こんな夜中に」という一言をつけることで、私に「それを言うならあなたこそ何を——？」と聞き返させようとしているのだろう。なるほど、これが巷で噂のコミュニケーショ^{ちまた}ン能力というやつなのかもしれない。

ない。深い。実に奥深く、そして興味深い……。

「……ただ、ここは敢えて――」。

「――ただの散歩」

聞き返さないでみる。

「あ、ああ……そうか……」

思った通り、彼は言葉に詰まる。私が聞き返すことを想定していたからに違いない。

私は内心ほくそ笑む。

「むう……」

彼は頭を掻きながら、困っているような表情をしている。これはこれで、まあ面白いのだけれど、このまま会話が進まないのもどうかと思い、続きを口にする。

「それで、あなたは？」

「え………ん、ああ、ちよつと寝付けなくて、ジョギングを、ね……」

回答までに少し間があったのは、「なぜこのタイミングで？」とか思ったからだろうか。

「ほら、今朝は朝練なかったからいつもより起きるの遅かったし、午後の授業中に昼寝したりしたから、どうにもこうにも眠くないんだよ」

私の口数が少ないからか、彼の方からどんどん話してくる。「ほら」とか言われても、私

は彼の朝練事情もお昼寝事情も知らな……ああ、朝練がなかったことは美月の日記に書いてあったつけ。それで一緒に登校して、何やら美月が彼にからかわれていたらしかった。つい先ほど読んだばかりなのに、既に色々曖昧になっている……。やっぱり私の記憶はところてんだ。もしくは鶏だ。

「んーと……それで、もしかしておまえも寝付けなくてこんなところに——？」

「……まあ、そんなところね」

なんとなく、川の方を見ながら答える。

「ふーん。って、まさか、また川に入ろうとか思ってるんじゃないだろうな？」

……なるほど、そう取られたか。でも、流石にあんな危険なことをまたやろうとは思っていない。あれは何と言うか、そう——。

「あれは、一時の気の迷いよ」

「だよなー。こんなに寒いのに川の中に入ろうだなんて正気の沙汰またじゃないよな」

「……………」

随分と酷い言われようだった。

でも、もし誰かがそんなことをしてるのを見たら、私だって同じことを思うだろうから、何も言い返せなかったりする。

「さて、俺はもう結構走ったから、そろそろ帰るけど、おまえは？」

「えーと……」

どうしたものか。そもそも「なんとなく」で出てきたわけだから、もちろん何かしらの目的があるわけでもない。それに、この夜の散歩にはそこそこ満足している。私としては十分な距離を歩いたし、それよりなにより、会えるとは夢にも思っていなかった人と、こうして偶然出会えたわけだし。

「うん。私も帰ろうかな」

「じゃあ、家まで送るよ」

何の躊躇もなくそう言われて、私は目をしばたたかせる。

私が言葉を発し終えてから、彼の台詞までの間がほぼゼロだった。まるで、答えを用意していたかのように——。いや、実際、用意していたのだろう。あの問いに対する私の答えはせいぜい三つ程度。「帰る」、「まだここにいる」、「もう少し散歩を続ける」の三つに対する答えを私が悩んでいる間に考えておくくらいはできる。これも会話慣れしているからこそなせる業だろう。少なくとも、私には絶対に無理なことだ。

——と、私が無言でいた所為か、彼が不安そうな顔をし出した気がする。

「ほ、ほら、夜も遅いし、ここら辺も何かと物騒……かもしれないし……」

自信はないようだった。でも、私の身を案じてくれているのだと思うと、悪い気はしない。むしろ、率直に言って、嬉しい。

「うん。送ってもらおうことにする」

私がそう言うと、彼は少し笑顔になって頷いた。



「——でも、園山さん、興味はあるんだと思うけど」

家に帰る途中、高浜君に、どうやら美月が千恵ちゃんの説得に苦勞しているらしいことについて、さりげなく、それも全身全霊を込めたさりげなさでもって相談してみると、意外な答えが返ってきた。

「だって今日の放課後、バスケット部の練習見てたみたいだったから」

「そう、なの？」

「ああ。俺も練習に集中してたから、どれくらいの時間見てたかまでは分からないけどな。それに、体育館の入口からこっちを見てる彼女に俺が気づいて、目が合った瞬間、怯える小動物のように逃げたってし」

なるほど。それならバスケットに興味があるとも考えられる。でも、それ以外の可能性がもう一つ――。

「バスケット部に好きな人がいるから見てた、という可能性もあるんじゃない？」

「おお、その線があつたか」

思いつかなかつた、と感心している。

「でも、それならそれでいい説得材料になるんじゃないか？」

「うん？」

説得材料？

私が不思議そうな顔をしているのを見て彼は話を続ける。

「園山さんがバスケット部の誰かを好きなら、その人を聞き出して、『その人にバスケット教えてもらえるよ』とか言うか、もしくは、その人自身に園山さんにアプローチしてもらうか」

確かに、それはいい手かもしれない。でも、それには大きな壁が二つほどある。

まず一つ目。

「もし、バスケット部に千恵ちゃんのような好きな人がいるとして、どうやってそれを聞き出すの？」

「あー、それは、なんかこう……気合いで？」

二つ目。

「もし、バスケット部に千恵ちゃんが好きながいることが分かったとして、その人が千恵ちゃんのこと好きじゃなかったら？」

「あー、それは、なんかこう……強引に？」

「……………」

無責任極まりなかった。

「でも、このタイミングでバスケット部の練習見てたつてのは、好きな人がいるというよりは、彼女もみんなと一緒にバスケットやってみたいんじゃないかな。今まで彼女がバスケット部のこと気にしてたことなんてなかったと思うし。ただ、何か理由があつて、どうしても踏み出せないとか——そんな感じなんじゃないかと」

「……………どうして、そう思うの？」

「んーと……勘？」

適当極まりなかった。

「踏み出せない理由……ね」

私程ではないにせよ、極端に運動神経が悪い千恵ちゃん。

もし、もしもの話だ。もし私が千恵ちゃんの立場だったとしたら、どう思うだろうか。

クラスメイトと一緒にバスケットをやる。一緒に練習して、球技大会で優勝を目指す。それは、

まあ、楽しそうなことではある。あるのだけれど――。

「――ん？ ああ、なるほど、そういう――」

「ん？ 何か分かったのか？」

「うん。まあ……」

「そっか。それなら、安心だな」

「……………」

安心、か。

実際のところ、全然そんなことはないのだけれど。

問題は山積みだ。

このことを美月にどうやって伝えるか。いや、伝えるべきかどうかさえ――。

悩みながら、澄んだ夜空に瞬く星を見上げて思った。

美月は今、どんな夢を見ているんだろう。

もう一度、もう一度だけ――。



いつのことだったろうか。

遙か昔のことだったようにも思えるし、とても最近のことだったようにも思える。

美月の机の上に一冊のノートが乗っていた。

なんの変哲もない大学ノート。表紙に持ち主の名前などは書かれていなくて、ただ「11」という数字だけが書かれている。まあ、ここにあるということは美月のものだろう。けど、いつも机の上を奇麗にしている美月にしては珍しい。ノートや教科書はもちろん、シヤーパーンすら転がっていないことが多いというのに――。

私はそんなことを考えながら、片手でそのノートの適当なページを開いた。

それは何気ない行動だった。別に、中を読みたいとか、彼女の書く文字がどんな文字なのか見たかったとか、そんなことは一切なかった。そこに山があるから登るのと同じく

らしい感覚で、とても自然にノートを開いていた。

——そのとき、私は初めて美月の日記を読んだ。



「のおおおおおおのおおつ」

昼休みに突入するなり、私は一人頭を抱えて唸っていた。悶えていた。猛^{たけ}んでいた。

……最後のは意味的に何か違う気がするけど、そんなことは棚の片隅へ湿^し気^けた煎餅と一緒に追いやっておくとして、だ。

今朝、私はとても早起きをした。それはもう物凄い早起きだった。なんと、いつもより二千四百秒も早く起きたのだ。分^{かん}に直せば四十分だけど、やはりそんな些細なことは気にしてはいけない。

で、その早起きは、今日こそ千恵ちゃんを説得するためのものだった。彼女がウチのクラスで一番早く教室に来る人物であることは結構有名なことだったりする。なにしろ断トツなのだ。二番目に来る人と二十分くらいの差があるのだ。そんなわけで、千恵ちゃんよりも早く教室に到着し、彼女が来たところで怒濤の説得を開始するつもりだった。完璧な

作戦……なはずだった。ところが、私が教室に着いてから千恵ちゃんが来るであろう時間までの五分の間に、私は自分の机に突っ伏して爆睡してしまったのだ。眠くて仕方なかったのだ。——いやはや、慣れない早起きなどするものではないな。わはは。

「つて、わははじゃなあーいっ!!」

ぐわっと両手を上げながら自分で自分にツツコミを入れて叫ぶ。その直後。

「うるさい！」

スパーンッ!

「ぐへっ」

ミッチーにツツコまれて撃沈した。

ハリセンでスマツシュだった。

コングのシールドさえも一発で割る勢いだった。

プリンだったら一発でお星様になるところだ。

「いつの間にそんな凶器を……」

音の割にはさほど痛くもなっていない後頭部を擦りながら、振り返る。

「いや、あんたが授業中ずっと浮かぬ顔してたから、そのうち叫び出すだろうと思って、作っておいたのさ」

ミッチーは、ぺちぺち、と自分の掌てのひらに白い手作りハリセンを当てながら、得意げに答えた。

「よ、読まれてた!？」

「朝飯前ね。あ、これ作ったのは朝じゃなくて英語の授業中だけど」

「……………」

「で、何があつたの？」

一応、心配してくれているらしい。だけど、そんな笑みを浮かべながら掌にハリセンぺちぺちやってたら、私が真面目な話をしてもしツッコんできそうな気がしてならないよ、ミッチー。

「や、実は今朝ね——」

と、ミッチーに真相を明かそうとした、正にその時。

「あの、美月さん」

ミッチーの影から、スツと千恵ちゃんが出てきた。

突然現れた彼女に、ミッチーも私も「おわっ」と声を出して驚く。

そんな私たちのリアクションなど気にも留めていない様子で。

「早くバスケの練習に行きましようよ。もうあまり時間がないんですよ？」

「え!? あ、ああ……。うん、そうだね」

「おや? と思いつながら、私は千恵ちゃん言葉に同意した。」

「お、やる気満々だね、千恵ちゃん」

「ミッチーは別段驚いた様子もなく、そう返した。」

——ああ、なるほど、きつと私が知らないうちに、ミッチーが千恵ちゃんを説得してくれているのか。と、思った直後。

「美月、上手いことやったんだね」

「ミッチーが私の耳元でそんなことを囁いた。」

……ほ、へ?



彼女は、音もなく教室前方のドアを開けて入ってきた。そして、私の顔を見て目を丸くしていた。

とりあえず、私は冷静に状況の分析を始めることにした。

彼女が入ってくるまで、この教室には美月以外誰もいなかった。そして、今入ってきて、

恐らくは驚いているのであろう人物、身長は私よりもちよつと低めで、髪はストレートでロングなサラサラヘア、何よりもフレームの一部に申し訳程度に薄い桃色が入っている眼鏡が良く似合っている彼女は、まあ、私の記憶やらなんやらが正しければ、千恵ちゃんだろう。

美月がいて、千恵ちゃんが来た。だけど、美月はどうやら寝ているらしい。

「……………」

うん、なるほど。状況が掴めてきた。

つまりは、そういうことなのだろう。

そして、偶然というべきか、必然というべきか、ともかくこの場に居合わせた私——いや、そもそも「居合わせた」という表現も正しいのかどうか分からないけど、この際、その程度の正誤については無視することにして、私が美月の代わりに千恵ちゃんを説得するのがいいような気がする。それに、上手くいけば、美月も喜んでくれるだろう。

自然と、自分の頬が緩んでいるような気がした。

誰かが喜んでくれるのを想像するだけで、人はこんなにも嬉しい気持ちになるものなのか。

——おっと、まだ彼女の説得に成功するかも分からないのに、私は何を考えているのだ

ろうか。捕らぬ狸の皮算用。飛ぶ鳥の献立。……私は狩りでもしようというのだろうか。甚だ物騒な話だと思ふ。

——えーと、私は何をしようとしていたのだっけ？

軽い頭痛がするのと同時に、思考の方向性が少々おかしくなっていることに気づいて、思考の世界から現実の世界へと意識を戻す。と、千恵ちゃんが私の目を見ながら、ゆつくりと後退するという逃げ方をしていた。……私はクマか何かなのだろうか？ だったら狸や鳥じゃなくて、鮭や蜂蜜を——。

「——って、ちよつと、千恵ちゃん！」

慌てて彼女を追おうとして——。

「はうっ？」

ビタン！

私は見事に全身を床に打ちつけていた。

有り体に言えば、転んでいた。

「……………痛い」

自分が転んだという状況を認識した後で、やっと痛みが追いついてくる。どうやら今日も私は私らしい。それにしても、ちよつとした痛みなら痛みとすら感じない私の感覚が、

痛みを訴えるということは、今の転び方は結構ヤバかったんじゃないだろうか、と少し心配になる。

「あ、あの……大丈夫、ですか？」

おっと。千恵ちゃんが心配して近寄ってきてくれた。

お、これは……チャンス、というやつだ。

「た、助けて……」

必要以上に苦しそうな声を出しながら、右手を千恵ちゃんの方に差し出す演技派な私。

「は、はひっ」

妙な声を出しながら、私が伸ばした手を両手で掴む千恵ちゃん。

「んーっしょ」

と、千恵ちゃんが私を引っ張り上げようとする。

そこで、私は気づいてしまった。

私はこの体勢からだ、一人で起き上がるのにも相当な集中力を要するほど運動神経に欠陥を抱えていることに。そして、千恵ちゃんもまた、私程ではないにしても、結構な運動音痴であることに。

つまり、そんな二人がこうしてどちらかを助けようとした場合、十中八九――。

「ひやっ!？」

「うわっ!？」

——二人とも犠牲者になってしまおうのである。

「うう……」

なにがどうしてこうなったのかは、想像に難くないけど、途中経過は、まあ、どうでもいいから端折るとして、とにかく現状。

仰向けの千恵ちゃんの上に私が押し倒したような形で倒れている。ついでに、私の顔が千恵ちゃんの胸の谷間に埋もれていたりする。なるほど、背はさして高くないけど、胸は結構ボリュームがあるようだ。羨ましい限りだ。で、もし私が男だったら、ここで千恵ちゃんが「キヤー」とか悲鳴を上げて、なんかこう、面白いことになるのだろうか。だとしたら、いささか残念でもある。自分に不甲斐なさすら感じる。なぜ私はこんな大事な時に男じゃないのか、と。

「あの……どいて、ください……」

「あ、ごめん、千恵ちゃん」

言いながら、私は細心の注意を払いつつ、一人で立ち上がる。

「い、いえ、私こそ——」

千恵ちゃんもフラフラしながら一人で起き上る。もちろん私は手を貸さない。理由は……ねえ？

それはそうと、これだけ色々大変なことが起きているというのに、どうして美月は起きないのだろうか、少し不安にもなるのだけれど、まあ、今この時においては、起きてくれない方がむしろ好都合だからよしとする。

「さて、千恵ちゃん」

「は、はい……なんででしょうか？」

もう逃げられないと悟ったのか、直立して私の目を見ている。眼鏡の奥のその瞳は、それでもやはり、何かに怯えているようにも見える。

——理由はとても単純。私にしてみたら、それに気づかない方が不思議なのだけれど……。うん、でもやっぱり、普通は気づけないのかもしれない。

苦しみ。

痛み。

恐怖。

そういった感覚は、いや、それ以外の感覚も並べてそうなのだけれど、それがなくなつた段階から、徐々に、時には急速に消えていく。消えて、忘れて。そして、思い出そうと

しても、それを感じていたときの感覚を完全に思い出すことなどできない。感覚なんて、そんなもの。こんな身体からだだからこそ、一つひとつの感覚を、とても「愛いとおしく」と言ってもいいほどに、大切にしている私ですら、そうなのだから。

過去に、ある状況で、ある感覚を味わったことのある人が、今それと同じ状況に置かれている他人の感覚を理解できるかといえば、まあ、できて六割といったところだろうか。まして、これまでに同じ状況に置かれたことのない人だったら――。

「さて、千恵ちゃん」

なんとなく、もう一度言ってみた。

二人とも無言の状態が微妙に続いた気がしたから、というか、実際にそうだったから、仕切り直しというやつである。

「ただでさえ、とつても伝わりにくいのに、言葉にしなかったら、もっと伝わらないよ。

……私には、あなたの気持とか、感覚とか、少しは分かるけどさ」

千恵ちゃんの眼鏡の奥の目が大きく見開いた。

疑っているのだろうか？

それとも、驚いているのだろうか？

よく分からないから、気にせずに続ける。

「みんながバスケの練習してるの見て、一緒にやってみたいと思ったんでしょ？」
「……………」

彼女は真面目な顔で私の目をジッと見てから、無言でコクリと頷いた。

「でも、どうしても踏み出せなかった。それは、他のみんながきつと忘れてしまっている、いや、もしかしたらバスケツトボールというスポーツでは感じたことすらない感覚なのかもしれないね」

実際に私がやったら、千恵ちゃん以上にそれを感じるのかもしれないけれど。

「目まぐるしく動く人、凄いスピードで飛び交うボール。千恵ちゃんは、きつと、そんな中にいることが——」

「とても怖いです」

「とても怖いんでしょ？」

私が少し言葉を区切ってから言ったら、千恵ちゃんの言葉と完全にかぶった。

彼女は、少し震えながら言っていた。

でも、そう。

言葉に、してくれた。

「怖くて、仕方ないんです。体育でバスケをやったときも、あのコートの中に立つだけで、

身が竦んで、動けなくなってしまうんです」

うん。それは私にもよく分かる。きっと私も同じ感覚になるはずだ。でも、それが本当に彼女とまったく同じ感覚かといえ、全然そんなことはないのだろうけれど。

「それに、そんな私が練習とかに参加しても、皆さんの邪魔に、足手まといにしかならないんじゃないかって——」

言いながら、俯いて、肩を震わせている。

「うーん。それは、違うんじゃないかな」

「え……？」

「例えば、み——」

「……み？」

「いや、その……みんな。そう、クラスのみんなは何て言ってくれてる？　というか、実際、クラスのみんなはどう思ってるって感じる？」

「それは……多分、私にも参加して欲しいって——」

そう。それは決して美月ひとりの思いではないのだ。

「そして、千恵ちゃんは、一緒にやってみたって思ってるんでしょ？」

足手まといにはなってしまうかもしれない。でも——。

「真面目にやれば、きっとみんな受け入れてくれるよ。邪魔だなんて思わないと思うよ。少なくとも、私は、ここはそういうクラスだと思うんだけど、間違ってるかな？」

「間違っていないと思います」

ほぼ即答だった。

なんだ。分かっているじゃないか。

だったら、私から言うことはもう——いや、お節介かもしれないけど、もうひとつだけ言っておこう。

「なんだか、千恵ちゃんは凄い戦力になる、らしいよ」

「え？ それって、どういう——」

千恵ちゃんの目が丸くなる。

うーん、驚いているのかな、やっぱり。

「それは今日の昼休みの練習で分かるよ」

「そうなんですか？」

「うん。ただ、それにはもちろん練習が要るから、今日と明日はかなり頑張らないとダメだと思うけどね」

「は、はいっ。私、頑張ります」

グッと両手を握って、力強く言ってくれた。

——これで一安心、といったところだろう。

ただ……疲れた。恐らく、こんな短時間にこんなたくさんの言葉を喋ったのは初めてだ。それに、異様に眠いし。いや、眠いのは朝だから当然か。千恵ちゃんの手前、大口を開けていたいあくびを無理矢理かみ殺す。

千恵ちゃんはその後も、二言三言私に何かを言っていたけど、眠気のあまり、意識が飛びそうになっていて、その内容までは頭に入ってこなかった。ただ、そのときの、何かを話している千恵ちゃんの嬉しそうな笑顔だけは、しっかりと目に焼き付いていた。

私はボーっとしながら、ちよつとした達成感と、ちよつとした罪悪感を感じていた。前者の理由は明確だったけれど、後者の理由に気づくには、少しだけ時間がかかった——。



何はともあれ、初めてクラスの女子全員でバスケの練習ができる。

「——はずだったんだけどなあ」

私はあからさまに嫌そうな顔をしながら、言ってみる。

それで状況が少しも好転するわけではないのだけど、口にせずにはいられなかった。

「すまない。俺にはどうしても止めることはできなかつたんだ。面白そうだから」と高浜君。

「つて、謝罪かと思ったら、最後に『面白そうだから』とか言った！ ちよっと！ その被害者は私なんだからね！」

「待てミツキン。ここで一番の被害者はアタシじゃないか？」と空閑さん。

「や、通りかかったから、つい——。それに、ツツコミ役は一人でも多い方がいいから」
要は飽和攻撃、人海戦術だ。ツツコミ役三人で事足りるかどうかといえば、微妙……と
いうか、何人いても無理な気さえするのだけど。

「はっはっはー。三人もツツコミが必要なほど高浜は凄まじいポケキャラなのだな？」

「いや、お前だから！ むしろお前は『ポケキャラ』なんて生ぬるい分類に含めてはいけない人種だから！ 日本全国の、いや全世界のポケキャラの方々に深く謝罪しろ！」

来栖キャプテンは今日も絶好調のようだ。そして、早速役目を果たしてくれている高浜君、お疲れ様です。

「つーか、なんでミツキンがクルスーに絡まれてるんだ？」

クルスーって……。どうして空閑さんはそんな独自のあだ名で人を呼ぶのだろうか。他にそんな呼び方をしている人は絶対にいない。

「色恋沙汰か？」

「的を射てる！」

「なるほど。ついにミツキンにも春が——」

「私じゃない、私じゃ！」

全力で両手を振って否定する。

「色恋だと？ それは何色だ？ ピンクか？ それとも赤か？ 赤？ 赤い彗星？」

「シャ○か！」

「白い悪魔？」

「ガ○ダムかつ！」

「青いイナズマ」

「ス○ツプかつ！」

「黄色いカレー」

「って何の話だ!!」

どんどん脱線していくキャプテンと、とりあえずツツコミだけは欠かさない高浜君。

「待つんだハマー」

空閑さんがなぜか高浜君の方を止める。またあだ名がおかしい。

「ハマー？ ハマーって、俺のことか!？」

驚いている。

高浜君本人も初めて言われたらしい。

「うむ。白い悪魔といったら、どちらかというと『な○はさん』ではないだろうか」

「誰!？」

と、高浜君、私、キャプテンが同時に聞き返す。

「なっ……まさかの四面楚歌!？」

空閑さんが追い詰められた悪役のように、半身になって一歩後ずさる。

「どうか、空閑さん、これ以上話をややこしくしないでくれるかな」

「ああ、アタシに勝ち目がないことは火を見るより明らかだからね」

勝ち目って……。

空閑さんも基本的に話を逸らすタイプらしかった。この場に彼女を引き留めたことは間違いだっただのかもしれない。

まだ本題にも入れていないのに、時間がかかり過ぎだ。そろそろ本題に入らないと、本

当に昼休みが終わってしまふ。

「で、私を捕まえた理由はなんなのよ」

なんとなく予想はつくけど、一応キャプテンに聞いてみることにする。

「うむ。昨日も話に出したが、清澄と——」

「断る！」

どうせその話だろうとは思ったよ。ああ、分かっていたともさ。

「いや、待て、佐々岡。お前は何かを勘違いしている」

「勘違い？」

「そう。清澄と親しくなりたいのは俺ではない」

「は？」

言っていることが分からない。

「だって昨日、『清澄に惚れた』とか何とか——」

「『俺が』とは言っていないなかつたはずだ」

「……へ？」

「ここまで言えばもう分かるだろう？」

「……何が？」

正直、全然分らない。

「つまり、俺たちバスケット部の後輩の武部君が清澄に惚れて、武部君からどうすればいいかと相談された俺が、清澄と仲がいい佐々岡に相談を持ちかけたということに決まっているだろ！」

「決まってるの!? っていうか、そんなこと一から説明されなきゃ分かるわけないし、何より、昨日の時点でちゃんとそれを説明してよ！」

「以心伝心すると思ったんだがな……」

「するわけないでしょ！」

このキャプテンと以心伝心できる生命体なんてこの地球上には存在しない。いたとして、金星人か火星あたりにだ。

「その後輩もなんでこんなやつに恋の相談なんかしてるのよ！ 絶対に人選を間違えてるでしょ！」

女性ファッション誌の表紙に原子力発電所を起用するくらいの人選ミスだ。

私は半ばキレ気味に高浜君と空閑さんを高速で交互に見る。

「いや……俺に聞かれても……」

「アタシは関係ないし……」

たじろぐ高浜君と空閑さん。

「……ゴメン。私が悪かった」

うん、八つ当たりは良くない。

「で、どういう経緯でその武部君とやらが栞を好きになったのかは知らないけどね——」

「いや、佐々岡、その話はもういいのだ」

「は？」

「実は今朝、武部君に『申し訳ないンスけど、来栖キャプテンに相談した自分が間違ってたっス。この話は忘れてください』と言われてしまってたな」

「武部君、気づくのがちよつと遅いよ！」

「いや、気づかざるを得ない状況になっただけなんだけどな」

高浜君が自分の額を押さひたいえながら溜息まじりに言う。

「こいつ、清澄さんと仲がいい女子を片っ端からとつ捕まえて、清澄さんと仲良くなる方法を問い詰めた挙句、大した情報も得られなかったからって、いきなり清澄さんに告白しやがったんだよ。しかも、そのときも武部君の名前は出さずに、ただ『お前に惚れた』とだけ——」

「うわ、最悪のメッセンジャー……。しかもそれ、武部君の許可を得ずにでしょ？」

「ああ、こいつがそんな殊勝なことをするはずがない」

「……………」

頭痛が……。

私も額を押さえながら溜息まじりに話を続ける。

「で、それに対する葉の返事は？」

「……それがまた厄介でな」

「厄介？」

「この馬鹿の『お前に惚れた』という一言に対する清澄さんの返事は、『一年の武部君のことかな？ でも私、武部君のことは良く知らないから——』だったそうだ」

「なんで伝わってるの!？」

「清澄さんだからな」

「……………」

清澄さんだから。葉だから。そんな理由で納得できてしまうのが怖い。

「さすがシオリンだな」

絶対に彼女はノリと言葉の響きだけであだ名を付けている……。そんな空閑さんは両手を組んで、うんうんと頷いている。

まあ、栞がなぜ武部君のことだと気づいたのかなんて、私たちが与り知るあずかことなどできるはずもないのだから、この場においてそれについて思考することも議論することも無駄な時間に他ならない。それよりも切実なる問題……というか、究極の疑問として。

「——じゃあ、結局いま私がキャプテンに捕まってる理由ってなんなのよ？」

話の流れからして、キャプテンは武部君から関与を拒否されているようなものだから、栞と仲良くなる方法云々の話ではなさそうだ。だとしたら、一体全体、私になんの話があるというのか？

「いや、実はな——」

と、キャプテンは近年稀に見るほどの真面目顔で——。

「その一件以来、武部君が俺と話をしてくれなくなっただけ……。なあ佐々岡、俺はどうすれば武部君と仲直りできるのだ？」

「なぜそれを私に聞く!?!」

想定外だ！ 想定外過ぎる！

「俺はなぜそれを佐々岡に聞いている!?!」

「知らないわよ！」

「なあ、ミツキン……。これは所謂いわゆる、時間の無駄ってやつじゃないのか？」

「うむ。正にその通りだな」

厚い胸板を張って堂々とそんなことを言うキャプテン。

「……………」

お前が言うな、などというツツコミはもはや誰も入れないのであった。

——そんなこんなで、貴重な昼休みの3分の1は無駄になってしまった。

それでも、残りの時間は目一杯バスケの練習でハッスルした。

初めての全員参加の練習。

みんなが真剣に、全力で、思う存分楽しんだ。

だから、最近少し身体の調子がおかしかったことなんて、忘れてしまっていた。嬉しくて、楽しくて、そんなことは完全に意識の外だった。むしろいつも以上に、他の誰よりも、走り回っていた。

けれど、その反動が練習を終えた直後に——。

そして……教室へ戻る途中の廊下で、私は、倒れた。